

やまさき文化

’11-3 *No.30



穴粟市山崎文化協会

人との繋がりを

宍粟市山崎文化協会会長

福岡久藏

◇ 目 次 ◇

かんえい堤

特別寄稿 上海で考えたこと

特別寄稿 子どもが本に親しむために

大竹智子

栗山節子

赤川弘三

茂田茂太

宗平圭司

志水出臣

深川剛佑

三宅哲朗

下村久仁甫

上田隆雄

石野和雄

福原光子

進藤賀翔勝

坂口隆裕

木下豊子

中村實

小野晋

清水省三

高瀬みのり

岡田明日香

中村未央

阪口隆裕

井口定子

勝木初子

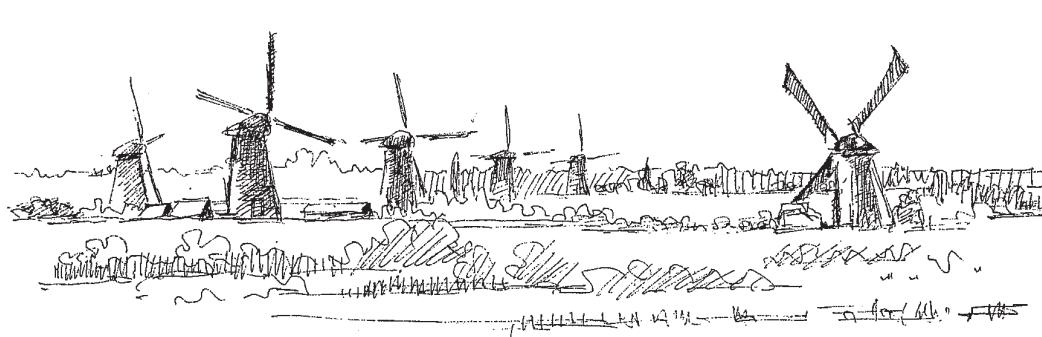
前野良造

鎌田裕明

前田欣一

福岡久藏

荒木俊介



昨年の暮れに「死んでも独り」というタイトルで、次のようなことが新聞に出ていました。

「駐車場に止めてあった軽自動車の中から遺体が見つかったが、死後三ヶ月が経っていて、車のドアミラーには薺のような植物が絡みついていた。その駐車場は公園の一角で、毎日、数百人の人が車の前行き来していた。」と。

駐車場の同じ所にいつも止まっている車を見て、誰も「変だ、おかしい」と気付かなかつたのだろうか。見て見ぬ振りをしていたのだろうか。それとも、関わりたくなかつたのだろうか。私などは時代がどんどん変化しているのに、いつまでも家族依存症の方ですので、親や兄弟はどうしているのだろう。子供はいなかつたのだろうかと思います。

しかし、戦後、私たちが目指したものは血縁や地縁に縛られず、のび伸びとそれが自由で、それぞれの個性が大事にされ、個が生かされる社会を望んで来たと私は思っています。だから、いま起きている悲しくて、哀れな多くの出来ごとは、私たちが選んだ「生き方」の結果なのかも知れません。「それでは困る」と引き返そうとしても、長い年月かけてできた慣習ですので元に復することは難しいでしょう。

私たちは人間なんだから、人ととの出会いを大切にし、目を合わせたり、頭を下げたり、言葉をかわしたりして、人との繋がりをつくり、時には驚きや感動を共有したり、共感しあって「生きていて良かった」「貧しくとも幸せだった」「人生って捨てたもんじゃない」といえるように生きたいものと思います。

かんえい堤	浅田耕三	赤川弘三	栗山節子	茂田茂太	宗平圭司	志水出臣	深川剛佑	三宅哲朗	下村久仁甫	上田隆雄	石野和雄	福原光子	進藤賀翔勝	坂口隆裕	木下豊子	中村実	小野晋	清水省三	高瀬みのり	岡田明日香	中村未央	阪口隆裕	井口定子	勝木初子	前野良造	鎌田裕明	前田欣一	福岡久藏	荒木俊介
特別寄稿	上海で考えたこと																												
特別寄稿	子どもが本に親しむために	大竹智子																											
短歌																													
俳句																													
山崎郷土研究会研修旅行に参加して																													
九州縦断記																													
ゴールデンエイジ																													
私の暮の師匠																													
私の生きる「景色」																													
謡曲同好会発足を振りかえって																													
時代の流れ																													
踊りとの出会い																													
芸能祭で想つたこと																													
山崎町民合唱のおまいり																													
山崎さつき祭りを顧みて																													
先達とともに																													
何か一つ趣味持つて長生きしなはれ																													
川柳 破丸会																													
合唱団に入つて																													
”																													
「ターンアート展」とは																													
ターンアート事務局																													
ただ日本舞踊に挑戦中です																													
さようならお師匠さん																													
事務局だより																													
編集後記																													

かんえい堤

山崎文学会 浅田耕三

「このかんえい淵には、大けなま鯉が十匹もおるんぞ。」
深いよどみは、水があおく沈んで、流れているとも思えない静かさであった。
その上に淡竹の根が二重、三重にからまりあいながら、淡青色の石苔せきたいが大小さまざまの模様を描いた黄褐色の石垣をおおっている。

「ここ、かんえい淵いうんか。」

私の家の二百メートルほど西に、菅野川すがのという小さな川が流れている。两岸の川ぶちは淡竹の藪で、その藪の中に榎や櫻の大木が疎らにまじっている。

このあたりは下流で、川幅はこの川では最も広いところであるが、それでも向う岸までせいぜい二十メートルもあるうか。

水無川で、夏や冬の渴水期には、白く乾いた石の堆積だけが河原に累々とひろがり、冬など、まことに荒涼とした風景である。夏はまだよい。そこここの小さな水たまりに、わずかながら湧水があり、そこに、春の、水が豊かに流れていた頃、本流から溯った小魚が、逃げ場を失って群がっているのをみかける。私が少年の頃までごした生家は、このあたりから八キロほど上流にさかのぼったところにあった。

あれは五年生の時だったかと思う。

川下の村の同級生のところへ遊びに行つた私はその友達と川へ魚釣りにでかけた。春も終りの頃で、私は、どうしたわけか、河原に生い茂ったクローバーの上に寝そべって、花にむらがる蜜蜂の羽音になやまされながら、その友達が流れの中に竿をつき出して釣っているのを、かなり離れたところから眺めていたような気がする。あるいはそれは記憶ちがいで、流れの中にそっと竿をさら、二人で草陰に身をひそめていたのだつたろうか。

なにしろ遠い昔の、かすんでしまつた追憶はさだかに思い出すすべもないが、浅瀬を渡り、水面に突き出した大岩の裾をまわった時、友達の言つた言葉と、大岩の上手の、深い淵の、氣味悪いような静かさだけが、不思議に記憶に残つてゐる。

鯉の十匹はおろか、山椒魚でもいそうな淵をこわごわのぞきこみながら私はたずねた。

「うん、この深いところがかんえい淵、上の土手はかんえい堤、いうんじゃ。」

旱魃のひどい年には、この中流あたりでも川底が白く乾いてしまう。水は、砂や石の下を伏流水となつて流れるのである。川底が高いせいであった。そういう年には、百姓は川底に深い溝を掘り、地下水を地表に湧出させそこに水揚げ水車を取りつけて、旱天にあぶられながら懸命に足で踏んで田に灌漑するのであった。

「どないなひでりでも、このかんえい淵だけは干ひ上がりんし、大雨が降つても堤は崩れんのんぞ。とつと、とつと昔から。」

友達は誇らしげに言つた。

日曜の朝、自転車でホームセンターまで如露を買いに行つた。

その帰り、ふと思いついて町立図書館へ寄つてみた。入り口のところで郷土史家の堀口さんにあつた。

「ああ浅田さん、いいところで会つた。ちょっとしたもののがみつかつてね。見せてあげるからおいでなさい。」

相変わらず眼鏡の奥の丸こい目を、せわしそうにしばたきながら堀口さんは言つた。で、私はその足で堀口さんのあとについていくことにした。

「これ読んでごらんなさい。」

そう言って見せて下さつたのが「廣斎覚書其三」である。表紙の下に「享保十一年丙午」とある。最近、大島家で当主義穂さんが土蔵を整理していくみつけだされた由。

「広斎って何者です。」

「横治広斎、名を楨藏といい、享保頃の本多家の大目付をしていた人物です。」
薄い冊子であるが、かなり几帳面な人物だったとみえて、小さな文字がぎつ
しりと書き込まれている。

「其一や其二もみつかったんですか。」

「いや、残念ながらこれだけです。」

夕方、夕立のあと涼しい縁先で、私は堀口さんから借りた「広斎覚書其三」
を読んだ。

二日二晩降り続いた豪雨の為に、藤井郷下金井のやじろ堤がおよそ二十間に
わたって決壊したのは享保六年八月はじめのことであった。
翌年六月、堤は修復されたが、それから僅か二カ月後の八月十二日、またも
や同じ箇所が流失してしまった。工事を担当した奉行は本多藩作事組頭の野田
嘉兵衛である。

再度決壊した堤は四年間放置された。堤に添った一反ばかりの畠は、持主の
百姓が割竹を杭にからませて応急の堤防を作り、耕土の流失を防いでいたが、
洪水の度に畠は少しずつ侵蝕された。

四年後の享保十年十二月、冬の渴水期を利用して堤は再び修復され、翌十一
年二月、築堤工事は四年ぶりに完成した。再工事の奉行は、最初の奉行野田嘉
兵衛の一子、嘉一郎である。

父の嘉兵衛は享保八年二月、自分の担当した工事がわずか二カ月にして脆く
も潰れた半年後、自害していた。

菅野川やじろ提築工事奉行、本多藩作事方、野田嘉一郎から、同工事の正
式な完成報告を大目付横治楨藏が受けたのは享保十一年二月十三日であつた。
あけて十四日、老職小室平四郎殿の検分に随行して楨藏は、城の西方半里のや
じろ堤にむかった。午前中は小室殿が所用の為、手が空かず、城を出たのは八
ツを少しまわっていた。

二人共徒かちである。

はるか城下の東部を南へ流れる本流の川面が、早春の陽をうけてキラキラと
輝いてみえ、その上に連なる山々が墨絵のように蒼くかすんでいる。北風の吹
き荒れた昨日までとはうつてかわったあたたかい日であった。

「こたびの工事、なかなか堅固にできるおるそうなが、そなたも下検分のおり
はそう思われたか。」

青く萌えた麦畠の中の細いなわて道を歩きながら、小室殿は楨藏に問うた。
「はい、工事がずい分入りである上、工法も今までの築堤工事とは全く異な
り、あれならば相当の洪水にもびくともしますまい。」

「なるほどのう。いや、わしも三日まえ、北見からおおよその事はきいたのじゃ
が、そなたもやはりそう思われたか。嘉一郎もこれで親の代からの宿願を果た
した。いずれその勞は十分にねぎろうてやらねばならぬが……」
ちよつと言葉をきつて小室殿はつづけた。

「横治殿」

「はい」

「死んだ嘉兵衛殿も草葉の陰でさぞや満足しておられよう。何よりの手向で
あつた。それに――、それにそなたもこれで肩の荷がずい分と軽くなつたであ
らう。いやいや、そなたばかりではない、わしもこれで責の一つを果たした気
がする。何にしてもめでたい事よの。」

年齢のせいであろうか。小室殿の
温かい心づかいがじーんと胸に響いてきて、それだけで楨藏は目をしば
たたいた。

四日前、完成間近の築堤工事を楨
藏は下見した。

高さ一間二尺の石垣は、下方に向
かってお壕の石垣のように傾斜し、
最下層の基礎とだいの外郭には本組みの石



の上にさらに石籠を配してゆるやかな勾配をつくり、二重の石垣となつて川底をかためてゐる。みるからに堅牢な石堤工事であった。

(ようやつた) 横蔵は水の涸れた川原に下り、石垣の上をあちこち歩いて、ほとんど完璧ともいえる工事を見てまわった。横なぐりにたたきつける寒風にまじって粉雪がせわしく飛びかい、あわただしく川原の石を濡らしていく冬の名残りの寒い日であったが、彼はその寒さすら、なにか快い思いであった。

大目付横治横蔵が、小十人組野田嘉兵衛を呼び、突然、作事組頭に役替えを命じたのは、享保七年五月末のことである。役科七石がついた。それまでの作事組頭鳥部九十郎にふとした不祥事があつて無役としたあとで補填であつたが、理由があつた。

上席家老小室平四郎殿と鳥部の後任について相談していた時、横蔵の脳裏に、ふと呉服問屋、加納屋重兵衛が、二、三日前、彼に話したことが頭にうかんだのである。

十日程前、加納屋に賊が入つた。時刻はしかとは分らぬがハツ半を少しまわつたところではないかといふ。睡入つていていた重兵衛は、ふと何かの物音をきいたような気がして目覚めた。じつと耳をすますと、たしかに何かの気配が母屋の裏の方にある。そっと起き出て、彼は番頭を起こし、一人で母屋の裏をうかがつた。藏破りであった。いつのまにやつたのか、三つ並んだ真中の土蔵の白壁が大きく破られているのが闇の中にはっきりとわかる。その暗がりにうごめいているものがある。目をこらすと影は二つだった。藏の中にまだ何人かいるらしい。

(うかつに手は出せぬ) 重兵衛はそう思つた。

「野田さまを呼んで参ります。」

重兵衛の腹をよんだように番頭の弥吉が落ち着いた声で言つた。門前町の加納屋から野田の屋敷までは小さな坂一つである。弥吉と野田嘉兵衛とは将棋仲間である。一人共、滅法強く他の者では相手にならない

(野田さまならば) 嘉兵衛の剣の腕前など知つてゐるわけではなかつたが重兵衛は何となくそう思つた。藏破りはただの小泥棒ではない。発見されたら反対に刃物をかざして襲つてくるかも知れぬし、それに相手は何人いるのかわからぬのである。

重兵衛はじつと見張つていた。が、それはほんのしばらくであつた。暗がりで突然、ひえッという悲鳴がおこり、それといっしょに激しい鞭鳴りの音を一度きいた。それつきり、物音一つしない。息をひそめていると、今度はバタバタッという足音がし、つづいてまたうッという悲鳴がきこえた。

「旦那さま、きてござらんなさい。」

目の前に弥吉の顔がぬつとあらわれて、ささやくように言う。

賊は三人だつた。あとで弥吉から詳しく述べた話では、弥吉が坂をのぼつて野田家の門をたたくと嘉兵衛自身が直ぐ起き出してくれた。手短かに説明する弥吉の話を黙つてきくと、嘉兵衛は何も言わず、いきなりすたすた歩いて庭を横切り、母屋の藁屋根の庇から何かをすつと抜き取り、今度は門の方へ向かつて歩いていく。うしろをついていく弥吉が何だらうと見ると、秋、収穫が終つたあとで、使用した韁のほこりを払いおとす、韁叩きの細い棒であつた。

「弥吉、ここにおれ。」

土蔵と納屋のあいだのところまでくると、嘉兵衛がふり返つた。嘉兵衛が口をきいたのはこれつきりである。

壁にあけた穴の口に一人の賊がしゃがみ、一人はかなりの大きさの黒い袋のようなものの中にせつせと運び出したものをつめこんでいる。闇をすかしてみていると、すつと近づいた嘉兵衛が、しゃがんでいる賊の肩のあたりをこつこつと軽く叩いた。はつとして振り返つた賊の面上に今度は激しい鞭鳴りがし、悲鳴をあげて賊はのけぞつた。ぎょっとして立上がつたもう一人が、とっさに逃げだそうとしたがそのままどさつとたおれた。鞭の音だけがきこえた。外の尋常でない気配を感じたのか、土蔵の穴からしゃがれた、低い声が洩れた。外はシーンとして応答がない。ふと弥吉が気づくといつまにか、嘉兵衛はびたつと白壁にからだをつけている。急におじけづいたらしく、藏の中のが穴か

らあわてて飛び出したところを、待ち構えていた鞭が襲つた。

「もうおらぬようだ。」

穴から蔵の内部をすかして、嘉兵衛は帰つていった。

「もし賊が刀を振り上げて襲つてきたらどうなされます。細い筵叩きなどでは

とても危のうございましょうに——、なぜお刀をつかわれません。」

翌日、礼に伺つた時、重兵衛がそう尋ねると嘉兵衛は手を振つた。

「何を言われる。」

そう打消してから理由を話したという。

「刀は重うての、あのような物はわしみたいに非力の者にはとても振り回せぬ。

今まで使つた事もない。それにもしそんな物で相手に深傷ふかでを負わせたり、万一命でも失わせるようなことでもあれば大事じやろう。命をとらねばならぬ程の賊はそれ程にはいまいからのう。そんな物より筵叩きなら軽いし、それに日頃から使い慣れとる。豆のさやもあれで叩くし、筵のほこりも払うから安心じや。」

本多藩では大半のものが、武士でも大なり小なり耕作し、少量の穀物は自給していた。(嘉兵衛の言いそうな事じゃ) 何事によらず理くつに照らして事を判断するいかにも嘉兵衛らしい言い方がおもしろい、と禎藏は思った。しかしその処置はみごとである。目立たない男で、無類の将棋好きという他、これといつて取り柄もないようであるが、禎藏は以前からこの人物には、注目していた。

「野焼きじやな。」

小室殿が呟いて立止まつた。二、三町先の川向うの畑の畦に、年老いたらしい百姓の後ろ姿が一つ、ぼつんと立つてゐる。顔をまっすぐに上げ、小ゆるぎさえしないで佇んでいるように見えた。その足元の、細長い畦のあちこちにちろちろと赤い火が見え、ぼうぼうとあがる煙の下に黒く焼け焦げた畦がみえる。枯草のこげる芳ばしい匂いが漂つてくる。

ふと視線をずらすと、低く垂れ込めた煙の彼方に、十五、六人の行列が歩いているのが見えた。春めいた陽射しがやわらかに行列をつつんでいる。先頭の墨染だけがひどく背が高く、他はおしなべて低い。棺が列の中央にかつがれている。百姓の弔いであった。禎藏は片手に拝み、瞑目した。小室殿も佇んで見送つてゐる。

「死なねばなりませぬか。」

(何を馬鹿なッ) そう言おうとして禎藏は口をつぐんだ。死なねばならぬか、そう問い合わせながら嘉兵衛の目はたしかに笑つてゐる。(こやつ、死んだりはせぬ。) そう思つたら、ふいと別の言葉が口をついて出た。

「その覚悟はできてるかの。」

「いや、まだなかなか」

「侍ならば日常からその覚悟が無うてはかなうまい。」

「いや、手前とて常住の侍の覚悟ならば——。」

「できておると申すのじゃな。」

「いかにもできており申す。しかしそれは——。」

嘉兵衛の眼がふと光った。

「おのれにも納得でき、まこと死ぬに値する奉公にでくわした時の覚悟でござる。いかに侍とて、わが身に納得もできず、いかようの理とも心得ぬうちに、ただやみくもに死に急ぐなど……愚かとしか思われませぬ。」

「愚か、と申すか。」

「はい。」

「おのれにもようわからず、いや、時には虚しいとはつきり分っている事にで

も、いさぎよう命を捨てるが武士道、侍の美しさ、と、そう説く者もおる。」

「いや、私はお目付殿ご自身のご意見承りとうござる。」

「わしか。」

植蔵は言葉を切った。瞑目した。

「わしとてそれを愚かとは思わぬ。もしそれが愚かというなら、何と悲しい愚かさ、か、と思う。」

「美しいとは？」

「うむ。」

植蔵はまた黙した。かすかに首を振った。死に、美しさなどあるであろうか。

若し、あるとすれば、それはあとに生き残った者が勝手にそう思うだけではないか。

ややたって植蔵は問うた。

「そなた、死にはすまないな。」

「死にませぬ。」

「うむ、それならばよい。もし死ぬような事があれば、わしの人を見る目はづい分と狂うておつたことになる。」

やじろ淵の築堤工事には工事費、錢二百貫文を要した。小藩にとつては決して少額ではない。だが、新堤は流失したのである。

家中に奇怪な噂が流れた。やじろ堤の工事には手抜きがあり、費用をうかして奉行がそれを私している、というきわめて悪意の中傷である。

三年前享保四年十月の末、藩の御料林から伐り出した松材五十石余を低い河

岸に集積していく時季外れの洪水に遭い、悉く流失した事件があった。伐採工事を宰領したお納戸役矢島清之助は人々の失笑をかたが、三日後、自宅の室にこもって自刃した。人々は瞠目した。よもや死ぬとは思わなかつたのである。一間の、末口差し渡しせいぜい五寸の松材五十石などたかがしれている。だがたとえ些少とはいえ、おのれの落度から藩の財を失つたのである。その責を負うて清之助は果てた。いさぎよい死に様、と人々は賞讃した。

それから三年たつて今度の事である。二百貫文を要した新堤は流れ、そのあと、武士はあるまじき噂を立てられながら嘉兵衛は生きている。

「野田はまだ死なぬのか。」

城内では、あるいは城下で、嘉兵衛をみかけた者が、何か意外なものでも見たようにな審げにその後姿をみつめる。嘉兵衛にしても家中のそういう目が分らぬ筈はあるまいに、と人々はささやき合つた。にもかかわらず彼奴は平然と生きていた、三年前の清之助と比べて、何という横着さだ、不快げに家中の者は面をそむけた。

工事最中に石工達の寝小屋

で、工事人夫が博奕をしていたが野田はそれを知りながら内緒で見ぬふりし、ひそかに彼らから寺銭をとつて賂まいしていた、というではないか、いつか噂にはそんな尾ヒレまでついた。



んだからである。以前から鳥部には金銭について執着の強いところがあつた。

「噂とは本来そういうものじゃ。事実をたしかめもせず、何もかもいっしょにして、放埒に出まかせをいう。まこと人の口には戸は立てられぬものよの。」

小室殿もこの噂には何とも手のうちようがなかつた。

楨蔵は吟味方の協力を得て、工事に関する再調査に当たつた。工事にかかわつた組内の家士にもたずね、人夫頭や石工の元締にもきいてまわつた。だが家中取沙汰されているような事実は何もない。

黒衣の僧を先頭にして葬儀の列は次第に遠ざかっていく。

なわて道はしばらくして河岸に達した。葬列とは反対の方角へ岸に添つて、三尺程の平坦な道を一人は下流に向かつて歩いた。

道端のかごの木の下の、枯草にまじつた彼岸花の葉が意外な程、鮮明な青さで陽に光つてゐる。よくみると枯草の消えた砂礫の地肌にぼつん、ぼつんと落のとうが芽生えている。

「行者山参りも効験しつけいんが無かつたようだの。」

歩きながら小室殿が、はるか野の彼方に一つの点となつた葬列に目をやり、独り言のように呟いた。

「寒い折ゆえ、大方卒中で斃れたか、とすれば年寄りであろうの。」「年寄りでしょうな。」

「寒い折ゆえ、大方卒中で斃れたか、とすれば年寄りであろうの。」

ここから二里余り、西の方向に行者山がある。村の誰かが病んだ時には百姓達は村中こぞつて行者山参りをする。麓の谷で身を清め山頂のお堂に一夜参籠して病氣平癒を祈るのである。家人に容態をたずね、病状が悪化したときければまた参り、いよいよ危ないらしいという時には二夜もつづけて参籠したりする。それは昔からの百姓達の風習であり、彼等の村づきあいの一つであった。

百姓同士のつきあいとはそれ程あたたかいものか、と楨蔵は思わずにはいられない。嘉兵衛が自害した時、楨蔵は侍といふものの脆さを今更ながら思いしらされた。あの時に感じた虚しさは四年経つた今も彼の胸にぱっかりと穴を開けている。

享年四十三歳だった。四十三年の生涯を、嘉兵衛は一体何をしていたのか。七石の役料に対する家中の嫉視や反目も分らぬではない。だが、ああまで他愛なく噂は広がり、半分は疑いながらも、火のないところに煙は立つまい、嘉兵衛奴、上役の厚遇に狎れおつて、と家中の多くが白い眼を向けたのだ。侍同志の間とはそんなにもお互いの心の通い合わぬものなのか。

「卒中といえば江見孫太夫は近頃、ひどいらしいの。」「どうも、そうらしゅうございます。」

「大分ひどいらしい。からだの方はよく動くそなが、それがかえつて厄介じゃ」と、先日城中で会つた際、伊之助が申しておつたが病人の世話には大分手をやいておるようじゃ。江見孫太夫は老耄している。昨年冬、卒中でたおれたが病の方は意外に軽く暫くして恢復したが、それ以来老耄がひどく、近所を出歩いてはあらぬことをしゃべり、妻女や伴伊之助がほとほと困じ果ててゐるという。

江見孫太夫——。楨蔵は蒼くかすんだ遠景の山々を眺めて目を細めた。数年前の、まだ血氣旺んだった頃の孫太夫の一徹な、激しい目が思い出された。

家中に例の噂がしきりだつたある夕方、楨蔵が嘉兵衛との面談をおえ、二人そろつて二ノ丸外の舗道しきみちを歩いていた時、本丸に通じる前栽の木の下からきこえてくる声高の話が耳に入つた。

「武士たる者が不名誉この上ない評判をたてられながら、未だに死にもせず、生きながらえておるとは、近頃は武士の値打ちもすたつたものよ、わしも長生きしたおかげで、とんだ似えせものせ者ものをみてしもうたわ。」

見れば江見孫太夫である。齡六十を超え、直情徑行、小柄で、頭は禿げあがつてゐるが赤ら顔に目尻の上がつた眼を光らせ、五体に精気をみなぎらせた老人である。狷介けんかいであつた。ほかに一人、若侍がいる。通りすがりに孫太夫に捕まつたのである。困つた表情である。そのうちの一人が楨蔵と嘉兵衛の姿をみとめ、あわてたようなそぶりをした。背を向けている孫太夫は気づかない。「どうした、大烟、そちはわしの言う事が気に入らぬか。」

大畠茂十郎は何か小声で言つたようだが、孫太夫にはききとれなかつたらし
い。

「何、もつと大声で申せ、武士たる者が女のような声を出しあつて。」

「禎藏は近づいてうしろから声をかけた。

「ご老人、相変わらずお元気なようで重置。」

振り向いた孫太夫は、そこに禎藏と、そのうしろの泉水の横の伽羅木の傍に佇んで、こちらを見ている当の野田嘉兵衛の姿をみとめた。一瞬、わずかに狼狽の色が、その面上を奔つたが、それは文字通り一瞬のことと、たちまちきかん氣らしい不敵な目が禎藏にからみついてきた。

「これはお目付殿、それにあすこにおられるは野田殿、願うてもないよいところでお出会いした。それがし、近頃、何やら気がむしゃくしましての、今も此処で、この連中を相手に日頃の鬱憤を晴らしておつたところでござる。この頃はわが藩のご奉公も昔に比べるとずい分とゆるやかになり、年寄にはとんと解せぬことが多うござる。侍も当世は算盤片手に銭金勘定の商人ぶりが流行つて参りましたな。」

「ご老人、何を根拠のお話かは知らぬが、少し早合点に過ぎませぬかな。」

「ほほう、ならばお目付殿は、今、噂のやじろ堤の話、ご存じないか。それなら一つご説明申そうか。」

「ああ、そのお話か。お手前も無責任な流言にまどわされておわすようじゃの、事実も知らずにむやみに人を疑うて悪しきまことに言われるは、お齢にも似合はず、いささか軽率に過ぎましょう。」

「何、無責任な流言と。」

たちまち禎藏の目の前に、憤怒に目を剥いた形相が迫つた。短軀の肩がいかつてゐる。禎藏は、不意に、自分でも予期しなかつた激情が身内を慄わすのを覚えた。

「さようござらう。再度申すようだがお齢には不足はない。家中の放埒な噂には、十分な分別をもつて真相をみきわめられるこ思慮もあつてよい筈。念の為申しおくが手前築堤工事に関しては細大洩らさず調査致した。だが、不審な

点は何一つない。いっそ若い者ならともかく、根も葉もない中傷の提灯持ちなど、ちとお慎しみなさるがよからう。」

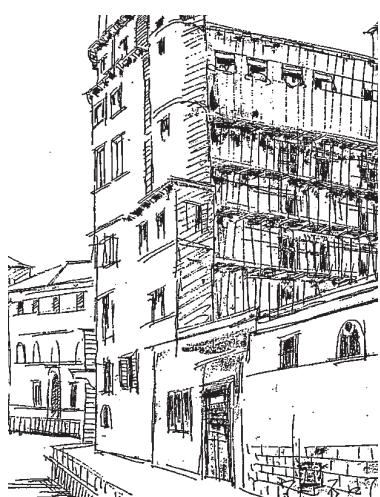
「ほほう。」

孫太夫は心底、意外なことでもきいたようにまじまじと禎藏をみつめた。

「これはまた、て厳しいお叱言を頂いた。お目付殿、あれが根も葉もないといわれるなら、一体あの堤をどうご説明なさる。石垣は素人が積んだわけでもない、菅野川に十年に一度の大水が出たわけでもない。毎年毎年、判で押したようにおそうてくる大水に、てもなく流されてしもうたではござらぬか。それでどうして、工事に手抜きは無かつたと証明なさる。いやいや、手前が申しておるのはそんな事ではない。手抜きがあったとか、無かつたとかそういう事ではない。わが身に任された仕事が、現に、あとかたもなく消え失せたのでござらう。そういう結果になりながら、ああ、あれは失敗だった、と、ただそれだけで侍のご奉公がすむものとは、それがしには思えぬ。」

百姓の上に立つて、汗もかかず、泥にも汚れず、のうのうと扶持をくろうて生きておる侍の奉公は、いざという時、たつた一つの命に執着せぬ事でござらう。それがのうては町人と何の区別するところもない。上に立つ者の範も威儀もござるまい。」

「なる程、言われる事よう分つた。侍奉公のしさま、人の生きよう、お手前は、お手前の分別をされたがよ



い。だが、それを他人に押しつけられるは傍迷惑と思う者もある。武士には、時には死よりも困難な生を生きねばならぬ事もある。惜しくもないのちを生き永らえて、やらねばならぬ事もあるやも知れぬ。わが身の死生の分別を、唯一絶対と思う頑固さはお捨てになるがよい。」

それだけ言うと禎藏はくびすを返して行こうとした。いつのまにか嘉兵衛が横に立っている。禎藏は嘉兵衛を促した。彼よりはまだいくらか上背のある嘉兵衛の顔を見て、禎藏はおやと思つた。嘉兵衛の顔は平生と変わらない。禎藏は何だかはぐらかされたような気がした。

「野田殿、お節介ながら申し上げる。貴殿の進退、家中二百の目が固唾をのんで見てござるぞ。いや、貴殿ばかりではない。ご一門の方々の事の処されよう、しかと見守つており申す。」

後姿を追いかけてきた孫太夫の声に、嘉兵衛は、つと立止まって振返った。

「ご心配あるな、それがしはじめ一族の者、人に指図されて斬る腹はもたぬが、おのれが死のうと思う時には、つい分とみごとな死によう、お目にかける。」

短軀の孫太夫を見下ろすようにゆつたりした口調で言つた。声にも寸分の激しさもない。

だが——享保八年一月十日の明け方、野田嘉兵衛は自刃した。

庭に面した居間の障子を開け放ち、裏返した畳の上にうつぶしていた。

「お世話をおかげ致します。」

知らせを受けて禎藏がかけつけると、妻女のいくは気丈な顔に涙一つ見せず出迎えた。青ざめてはいたが寸分の乱れもない。

(これは覺悟の上だ) 禎藏は直感した。思つた通りであつた。妻女にも、一子嘉一郎にも、近日中に自決する旨を嘉兵衛は申し渡していく。

だが、隣の間に寝ていた妻女は、夫の臨終を知らない。物音一つきこえなかつた、という。細目に開けていた間仕切りの襖の隙間を通して入ってくる明け方の冷氣に彼女は目覚めた。あ、寒い、と思つて隣室との細かいを見やつて、ぎくとした。夫は死んだ、瞬間にそれを覚つたといふ。

起き出で、襖を開けると血の匂いの中に夫はうつぶし、すでにこと切れていた。

「せめて死の間際ぐらい遠慮のう、呻き声の一つもあげてくれてもようございましょうのに……」

そう言つて禎藏を見上げた彼女の目は一瞬激しくもえたが、急にがくんとうつむき、さすがに細い肩を波打たせた。

「わしが死んだら、それだけを横治さまに知らせよ。」

そう言いおいたという。

書置はなかつた。予想していたことであつた。何を書き遺すことがあろう、嘉兵衛はそう言つてゐるのである。どうしておれが死なねばならないのか、そう問い合わせながら死んだにちがいない。幽明の境を越えて嘉兵衛のそんな声がきこえてきそうな気がしてならない。

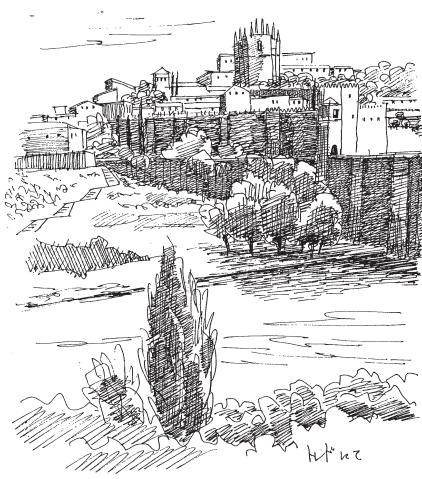
検屍も終り、遺体は別の部屋に安置されてそこからかすかに線香の香が漂つてくる。血の匂いもすでにない。黙念と縁に坐して、禎藏は早春の陽を浴びた。縁先に近く、白梅が三分咲である。

この梅が咲くのを待つ

ていたのであろうか。障子を開け放ち、梅の香を

部屋一ぱいにしてその中で死のうと思ったのかも知れぬ、だから明け方をえらんだのだ。禎藏の目につと涙がうかび、一すじ、頬を伝つて流れた。

野田一族の長老、野田惣右衛門が、七十二歳の老腹を切つて果てたのは



嘉兵衛がなくなる十日前のことである。

「藩祖忠勝公以来、忠勤をぬきんでたわが家門に、そなた泥をぬる氣か。」

惣右衛門は何度も嘉兵衛の家へ足を連び、自決を迫った。嘉兵衛にその気がない、と見てとるや、倦むことを知らぬ老の一念でかきくどき、かきくどき、目に涙をうかべて自決を懇請し、哀願した。

「そなた一人で死にたくなければ、わしも共に。」

「はては三つ子でもすかしなだめるように言いきかせようとする。

「叔父上、それがしにはまだやりとげねばならぬ仕事がござる。仕損うた仕事は生きて仕遂げねばなりますまい。仕損じたまま死ぬことが侍の奉公とは、どうしてもそれがしには納得できませぬ。」

「そなたは仕事を仕損じたばかりではない。武士にはあるまじい汚名までかぶせられておるのじやぞ。その上に生きながらえたとて一体何ができるよう。よいか、ひとたび武士の廢った侍の、残された武士道とはただ一つ、死ぬしかない。そこのところをよう了簡せい。」

そして最後に言う言葉はきまっていた。

「そなた一人に死ねとは言わぬ。わしも一しょに死んでやる。だから、のう、や言いいかえす氣力もなかつた。

老の繰り言を嘉兵衛は泣きわらいに顔をゆがめてきいていた、という。もはききわけてくれい。」

そして惣右衛門は死んだ。
——一足先に参り候て無明の奈落に灯りをともし、そなたのお越しをひたすら待ち居り候、かならずかならず、後より参られ、老の手曳き候て三途の川をお渡し下されたく候——

嘉兵衛は自分にあてたその書置を読んだ。読み終えてかたわらに置いた。

「武士も名も、とっくにわしは捨てておる。だが、いのちだけは今捨てるわけにはいかんのだ。」

ぼつんと一言、傍らのいくに呟いた、という。だが、老の執念のおそろしいまでのすさまじさを、嘉兵衛がいよいよ知らされたのは、それから一日経って、

惣右衛門の葬儀を終えた夜、惣右衛門の末弟、要之助から叔父の言い置きをきいた時であった。

「もし、嘉兵衛がなお渋るようならば、その時はそちが道連れにせよ。何事もお家のため、家門の為ぞ。」

「いく、もはやこれまでだ。」

嘉兵衛は仕方なさそうに笑った。自分が死なねば要之助叔父までが死ぬ氣でいる——。

春先のこととて水は涸れている。わずかな川底の湧水は工事場の上流、四、五間のところを深く掘って溜め、そこから工事の堤を避けて迂回した堀割を長々と掘り、下流へ流している。

「いかがでございます。」

植蔵は、新堤のちょうど中程に立って、上から石垣を見下ろしている傍らの小室殿に意見を求めた。

「うむ、わしも北見からきいてはおったが、——なる程のう、これならばどれ程の水が出ようと十分にもちこたえよう。嘉一郎、ご苦労であった。有難く礼を申すぞ。」

小室殿は、傍にひかえた野田嘉一郎の勞をねぎらい、河原へ下りて上流の方へ歩きながら、石垣の固さをためすように手でさわっている。表情がいかにも満足そうであった。

小室殿が満足したのも無理はない。長さ二十二間三尺の新堤は、今まで見てきた築堤工事とは全く工法が違っていた。

「一尺の奥行に対し、一尺三寸の高さに勾配をつけております。川底から直立した石垣では、石垣の面に当たる水の量は最も多く、その量が多ければ多い程度の角をゆるく、丸くして流れる水の力を弱めることをまず考えました。石垣の基底部分の外郭には、割竹で編んだ目籠に大小の石をとりませて入れたものを敷きつめておりますゆえ、水は直接石垣の基礎には当たらず、また水の力も

瀬流れのよう弱うなる筈です。」

「石垣そのものも奥行が深ければ強かろうの。」

「直立したものに比べると、ほぼ五倍程の強さはあるかと思ひます。」

嘉一郎は石籠に覆われた部分の上方の石垣をみせた。

「石垣が崩れるのは、下方を水で洗われて、基礎が崩れる場合、上部を人や荷車が通り、その重みに押されて中央部が外へせり出す場合とがほとんどです。だがこうしますと、その両方の欠陥を防ぐ事になります。」

淡々と嘉一郎は説明した。誇るようなそぶりもない。

「これだけのものを考えたは、むろんそなた自身人知れぬ苦労も重ね、相当に工夫もしたのである。じゃが、年も若く、経験もなかつたそなたが、一体どうやってこれだけの工法を工夫したかの。」

小室殿がたずねた。禎藏も横できき耳を立てた。当然の疑問である。禎藏もかねがね不思議に思つていたことである。

問われて嘉一郎は下を向いた。唇を噛み、しばらく答えない。やがてつと顔をあげた。「それにつきましてはお二方に、此処ご検分ののち、お見せしたいものがござります。」

ひどくきっぱりとした言い方である。

「さようか、それならば見せて頂こう。」

「少し遠うございますが手前、ご案内申します故ご足労下さいますよう。」

固く、妙に思いつめた表情で嘉一郎は言った。

二人は後にしたがつた。河岸から畠中のなわて道に出、山の麓をしばらく歩いて峠間の小径に入った。四半時も歩いたろうか。

貧弱な杉がまばらに生えた傾斜面の小径をくだりながら、先頭の嘉一郎が言った。

「ここにございます。」

嘉一郎が立止まつた。谷の中央に小さな流れがあつた。水際の砂地に柳が白い芽をつけ、ちからしばが、枯れしほんだ穂をかすかに風になびかせている。

「あれをごらん下さい」

嘉一郎の指さすところに奇妙なものがあつた。杉の丸太を組んだ櫓が地上一

間程の高さに立つてゐる。櫓の上に天水桶があり、そこまで一間程の長さの樋が地上から斜めにたてかけてある。樋は幅広く、八分板の頑丈な桧材であつたが、長い間風雨にたたかれたらしく、黒ずみ、朽ちかけている。何年か前のものらしい。櫓には何本かの桁がとりつけてある。

いぶかしげに二人はその半ば朽ちかけた奇妙な櫓をみつめた。これは一体何か。

「父嘉兵衛の実験所にございます。」

「実験所？ 何の？」

禎藏が問うた。

「水の力の強さ、よわさ、その水に対する石組みのつよさを調べ、新しい築堤工法を工夫する為の実験所にございます。」

「なに、嘉兵衛殿がこのようをものを。」

「はい、父はやじろ堤工事に失敗したあと、夜遅くまで、紙に図をかいて考え、老谷村の石工を呼んでたずねたりしておりましたが、ある時、此処にこのようなものを作り、一人でいろいろと試験をして考えておりました。私がこの度、用いました工法は、すべて父が工夫し、父から教わったものでございます。この櫓の桁は樋の傾斜度を自由に調節できるようにしてしております。」

「嘉兵衛殿は——こんなことまでされておつたのか。」

小室殿の声が慄えてゐる。禎藏とて同じであった。いい知れぬ感動が胸にひろがり、声がつまつた。

「大叔父惣右衛門殿が亡くなられてから、急に父はあわてました。私を此処へ連れて来、私に実験してみせ、自分のこれまで工夫してきたことを悉く私に教えました。私はその工夫の通りにこの度の工事をしたのでございます。」

嘉一郎のほおは涙で光っていた。彼はなおつづけた。

「やじろ堤工事をとどこおりなくおえたら、お目付、横治さまを此処へお連れしてこの実験所を一度だけお見せしてくれ。志半ばで死なねばならぬが、あの

方に見ていただいたら、わしはもう何も言わずともよい、そう申しました。しかし私はご家老にも見て頂きました。父はきっと喜んでくれると思います。」

涙で濡れた目を上げ、嘉一郎は笑った。

「もう一つございます。父はこうも申しました。やじろ堤再工事はいずれお前にご下命下さると思うが、もし万一ほかの者にお命じになるようなら、その時は必ずお目付殿を此処へお連れ申せ、と。」

「横治殿、この度完成した堤はこれより後、嘉兵衛堤と名づけたいと思う。百姓たちにもそう呼ばせよう、いかがかな。」

杉の疎林をのぼり切って一息ついた時、小室殿はふり返って槇蔵に声をかけた。

かんえい堤とは嘉兵衛堤の転訛てんかであろうか。少年の頃みた、青磁色の石苔せきたいが大小の模様をうかべた黄褐色の石垣は、二百数十年を、崩壊もせずに耐えつづけてきたのであろうか。

近いうちに私はもう一度、あの淡竹の茂った川土手へ行ってみようと思う。

(これは一九八六年全国公立学校共済組合発行の『文芸広場』に発表
したものとのリマークです。作者)



第三十一回春の芸能祭ご案内

日 時 平成二十三年五月十五日（日）

午前十時から

場 所 宍粟市山崎文化会館（サンホールやまさき）
主 催 宍粟市山崎文化協会・助山崎文化振興財団
後 援 神戸新聞社・宍粟市教育委員会・宍粟市

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご覧くださいますよう、
ご案内申しあげます。

参加部門 山崎詩舞道連盟 山崎邦楽の会

山崎日本舞踊の会 さつき民踊グループ

山崎民謡連合会
その他宍粟市内より賛助出演



上海で考えたこと

—漢字と和製漢字—

赤川 弘三

(栃木市山崎町出身)

上海での仕事の合間に時間を作つて博物館へ行つた。

上海の地下鉄は東京と同じくらに網目状になつていて、乗り換えながらかなり広い範囲を十五円から八十分くらいで行ける。ちなみに、上海博物館のある「人民広場駅」までは約三十円で、そこからすぐのところであった。前庭には泰山木の直径三十cmもある白い花が満開である。

社会主義国、中国では考へてもみなかつたが、こここの博物館は展示品の写真を撮らせてくれるのでびっくりした。それにしても、好きな陶磁器、特に北宋、南宋時代の磁器を楽しみにして来たのだが、これは残念ながら、台北の故宮博物院とは比べようもなかつた。

ところで、この上海博物館の最寄りの駅は人民広場駅で、「廣」という漢字は、写真のようにムがなく、なんとなく座りごこちが悪く、かんじが悪いのである。

それから、上海のタクシーは良衆タクシーといったと思うけれど、「衆」という字が大胆に簡略化されている。人という字を三つ書いているのだが、众の字は私は読めなかつた。元々、「衆」の下半分の書きにくい妙な形は人の字三つから出来ているのだそうだ。なるほど、衆という字の人々が集まつているような意味合いからして納得できる。

それにしても、四千年の歴史ある漢字をこんなに勝手に略してしまつてもいい

いのか、と思う。漢字の発祥の地中国でのこのようないわゆる「簡体字」の氾濫は、日本も、台湾や韓国も二階に上がってはしごを外されたようで、いくら中国であつても、何の相談もなく勝手に漢字を変えるな、と言いたいくらいだ。そうなのだけれども、考へてみると、実は日本側でももつと早くからこれと同じくらい大胆に漢字をくずしたり、分割したりして、ひらかなやカタカナを編み出している。それに独自の和製漢字も創つていて、中国人には読めない漢字も多いのである。たとえば、軒、榊、烟、筈、癌、辻、廻、嵐、峙、鱈、粹、鞄、糧などはその和製漢字である。

もうひとつ、友人から聞いた話だけれど、中国で設立した現地法人の社長をしているときに、中国側との契約交渉で、難しいことになつて、暗礁に乗り上げた状態となつてしまつた。

その時、中国側が言うことに、「貴方達は中国の文字をただで手に入れて千五百年も使つてきているが、我々はそれに対して何の対価をもらつたことがない。それなのに、このくらいのことは譲歩しても当然じゃないか。」と言つてきたとのこと。

さすが中国。大陸のお人は交渉事に千五百年も前の貸し借りまで言うのだ。そのスケールの違いに驚く。この交渉の結末は聞いていないが、このような途方もない言い分に対し、うろたえないで、こちらからも返答をしなければならない。

考へてみたのだが、たとえば、



人民広場駅。2号線と8号線の乗り換えができる、と理解できる。

「なるほど、『昔の』中国の方には親切にも漢字を無償で教えていただきました。これには大変恩義を感じています。

しかし、私たちも“現代”的”の中国の方達には、私たちの創った大切な言葉、日本語である和製漢語をたくさん教えて来ています。その言葉は近代における中国の政治、文化、科学や哲学、生き方、考え方などになくてはならないキーワードとして、大いに貢献してきています。

例えば、あなたがたの中国の国名、「中華人民共和国」ですら、人民も共和国も日本人が創りだした漢語です。私たちもそれに対してもう何ら対価はいただいたことはありません。」

状況にもよるけれど、仕事上、売り言葉に買い言葉、それぐらいは言いたい。

そういうえば、私たちは幕末から現代までの近代化に応じて、大変多くの言葉を作り出してきた。その日本人が作った和製漢語としては、

社会主義、共産主義、唯物論、自由、権利、議会、右翼、左翼、資本家、組合、人民、人権、思想、理論、幹部、議員、分配、階級、進化、原則、方針、法律、資本、経済、工業、協会、金融、銀行、決算、証券、現金、金額、債券、市場、原子、質量、時間、酵素、水素、原理、元素、固体、時間、紫外線、定義、宗教、速度、哲学、理性、空間、感性、緊張、義務、効果、進化、性能、電子、電波、温度、意識、義務、教養、主観、客観、実感、刺激、宗教、哲学、探検、文明、文化、芸術、美術、文学、悲劇、喜劇、抽象、漫画、舞台、広告、建築、歌劇、演出、広場、などなど、まだまだある。

そもそも、中国の近代化に重要な鍵となつた言葉がたいへん多くある。このような単語は古来中国にはなかった言葉で、日本人が中国側に教えた「日本語」なのである。

日清戦争後に日本に留学してきていた中国人が日本製の漢語を学び、これを中国にもたらした。中国では近年までけんけん譯々の論争をしてきたが、毛沢

東はこれらを使用することを認め、現在に至っている。

「今やこれらの日本語なくしてあなたたちの日常会話が成り立たないくらいではないですか。」というくらい、場合によっては言つてもいいのではないか、と思う。

もつとも、日本と中国は互いに引っ越しできない隣国同士、そういうような漢字の話が出る機会があれば、もっと仲良くなれるとてもいい機会かもしれない。

それにしても、上海の街を歩いていて、看板から店の業態を推定したり書いている内容を考えるのは楽しい。歯科という看板は歯医者さんのことか。中国では牙を治すんだね。方便商店はコンビニ、小酒館は居酒屋、餐厅はたぶん高级レストラン、啤酒はビール、饭店はホテル、理发店は理髪店、地鉄は地下鉄、磁浮列車はリニアモーターカーなどなど、推測しながら歩くのは楽しい。

私なんか、「ここにちは」、「冷たい啤酒をください」、「ありがとうございます」くらいしか中国語は話せないが、まあ、これさえ言えれば楽しく生きていく。それでも漢字の筆談で少しは分かりあえる。お陰で、街を歩くと、左の手のひらは漢字だらけで黒くなってしまうけれどね。

著者のプロフィール

昭和20年山崎町中広瀬生まれ。
山崎高校1年生修了後東京に転校。
早稲田大学理工学部卒
石油開発関連会社社長

現代美術家協会 会員（油絵）
日本美術家連盟 会員
山崎ターンアートクラブ会員
しそう SNS 「E一宗栗」参加

子どもが本に親しむために

—自分自身の体験と子育てを通して思うこと—

学習院女子中等科・高等科教諭

大竹智子（旧姓大西）

（六栗市山崎町出身）

好きなことがあるというのは人生を豊かにすると思うが、その中でも本を読むことが好き、本は面白いといえることは幸せだと思う。小説を読むことによって何通りもの人生を生きられるとはよく言われることだが、『今ここでないどこか』に瞬時に連れて行ってくれるのも本の魅力である。

国語教師として二十年以上、多くの生徒とたくさん作品を読んできたが、普段から本をよく読む生徒ほど、作品を深く味わい、楽しみ、自分の糧にしていくようと思う。これもよく言われることだが、「本を読む」というのは能動的な営みで、テレビとは違って、待っているだけでは何も始まらない。それだけに、少し「誘導」あるいは「訓練」が必要な楽しみはある。本を選び、表紙を眺め、ページをめくり、本の世界に入っていく。そこには無限の広がりがあることを小さい頃から経験していると、自ら本を手に取るようになっていく。

小さい頃の読書体験で思い出すのは、「読み聞かせ」ということである。子

ども—まだ字が読めない場合が多い—が誰かに本を読んでもらう「読み聞かせ」。私自身、子供の頃母親が、布団に並ぶ兄弟三人に本を読んでくれていた記憶がある。特に『フランダースの犬』でネロが死んでしまう場面の悲しさが今でも心に残る。

だから、私も息子が小さい頃は、毎晩、文字通り毎晩読み聞かせをした。夜七時過ぎに保育園に迎えに行き、夕食・入浴・連絡帳の記入・明日の準備と息つく暇もない日々の中で、寝かしつける前のひととき、子どもと絵本を読むのは（今から思えば）至福の時であった。息子はよちよち歩きの頃から寝る前に

なると必ず本棚へ行き、一冊一冊と本を抜いては私のところへ当然のように持ってきた。そして、私の横にちょこんと座っては読み始めるのを待っていた。同じ本を繰り返し読まされるのに閉口したこともあったが、そのうち息子がそのまま字が読めるかのように声に出しているのを見て、言語の習得過程を考えたり、繰り返しの大切さを感じたりした。

私が勤めている学校では、国語の授業の一につい、「読書の時間」というのがあり、生徒たちは図書館に行って本を読んだり、読書記録を付けたり、お気に入りの一冊をクラスメートに紹介したりといった活動をしている。さらに、自分が今までを振り返り、本との関わりについて「読書体験記」というような作文を書くこともあるのだが、言語能力の高い生徒の多くが、幼い頃に親に読み聞かせをしてもらい、それがとても好きだったということをしばしば書いていた。また、父親なり母親なりが「これは面白かったよ」といって、本を薦めてくれたり、買ってきてくれたりしたという経験も多く書かれていた。

家庭の中に本があること、親が子どもを本の世界にいざなうことは、子どもが本好きになるのに重要なファクターだと思う。また、親自身が読書をしている姿を子どもに見せることも、本が魅力にあふれるものだという認識を子どもに持たせることにつながるよう思う。

本に親しむのに家庭の果たす役割は大きいと思うが、不幸にして家庭に時間的余裕やそういう文化がない場合がある。そうした場合も、外からの働きかけがあれば本の世界は子どもに向かって扉を開くと思う。

何年か前に新聞記事で知ったが、ある自治体では、「ブックファースト」と名づけて、赤ちゃんが生まれた家すべてに絵本を贈るのだそうだ。本による祝福。人生の始まりに本があるのはすばらしい。自治体から送られることで、どの家庭にもこの祝福は届く。

外からの働きかけとして、本の貸し出しシステムがすぐ手の届く日常の中にされることも重要である。貸し出しと言えば図書館であるが、近くにないとなかなか行けないという場合もある。特に働いている母親には時間的な余裕のないことが多い。息子が通った保育園では、保育士の先生が読み聞かせをしてくれ

るのはもちろん、帰りに本の貸し出しをしてくれた。保育園の一室が図書室になっていて、お迎えのついでに立ち寄れた。これはありがたいシステムで、ほとんどのお母さんたちが子どもにねだられ本を借りていた。息子はとっでもその部屋は魅力的な場所であり、どれだけ私が急いでいるときでも必ず立ち寄りたがった。そして、先生に読んでもらった本を私に示し、それを借りた。

先ほどの「ブックフェアースト」ではないが、少し大きくなつてからも家族ではない他の誰かが本を贈ってくれるということがある。これは子どもの人生に家族から与えられるものは別の彩りを与える。三十五年以上も昔、私が小学四年生の頃だったと思うが、母方の叔父が、『源氏物語』のジュニア版をプレゼントしてくれた。読後、母親に「どうして光源氏には何人も奥さんがいるのか」と素朴な疑問をぶつけたのを覚えてる。私が大学の国文科に進み、国語教師になったのは様々な要因からであるが、この一冊が根源的なところで影響を及ぼしたことは間違いないと思う。

本とともに育てたつむりの息子は、しかし、小学校に入学するやいなや、ひたすら外で遊び、自ら読書しようとはしなくなつた。「字を覚えたら本は自分で読むようになるものだ」という思い込みから、読み聞かせをしなくなつたことも遠因ではないかと今なら思うが、当時は本を読まない息子に動転し、あれこれ試みたが全く効果はなかつた。機が熟すのを待つしかないと腹をくくるまでは相当葛藤があつた。

再び読書の楽しさを息子に教えてくれたのは小学校の図書の時間である。五年生の秋、息子は学校の図書室で手に取った『水滸伝』に夢中になり、挿絵のほとんどない単行本を次々と読み始めた。この時、学校の授業が子どもに与える刺激を痛感し、心から感謝した。まさしく外からの働きかけであつた。親ではできなかつたこと、すなわちさらに深遠な本の世界に息子をいざなうことを学校が行つてくれたのである。

きの同僚が、「息子さんに」と柴田鍊三郎の『英雄三国志』六巻を贈ってくれた。息子（と私）は狂喜乱舞し、その後今までにもまして「三顧の礼」だと「苦肉の策」だと家庭での話はほとんど『三国志』一色になつた。

再び私にとって至福の時が訪れた。あの小さかつた息子が自分と同じ本を読み、語り合えるようになるとは！ 息子に負けじと何十年ぶりかの『三国志』を読み返しながら、職業上読まねばならない本に追われ忘れかけていた、他に何もいらない、本さえ読めれば十分幸せという感覚を思い出した。また、私が子ども們頃、諸葛孔明の話題が出た時に父が「星落秋風五丈原」と土井晩翠の詩を教えてくれたことも蘇ってきて、世代を越えて読まれる「古典」というものの意味を知つたように思つた。

息子は中学生になつた。読書に関してはもうほとんど手助けも心配もいらない。ただ一緒に楽しむだけである。



著者のプロフィール

1964年生まれ。菅野小学校、菅野中学
校、山崎高校を経て、1987年お茶の水女子
大学文教育学部国文学科卒。1989年お
茶の水女子大学大学院修士課程修了。学
習院女子中等科・高等科勤務。

共著に『後拾遺和歌集新釈』上・下巻
(笠間注釈叢刊)

短歌

謎のホームレス歌人

新樹短歌会 栗山節子

私がホームレス歌人の短歌に出会ったのは、朝日歌壇の入選歌のコピーを友達から貰った時であった。

自称「ホームレス公田耕一」の短歌を選者佐佐木幸綱、永田和宏が真に迫る、知的な歌と注目、話題を呼んでいた頃かと思う。作者は年齢も経歴も不明、公田耕一の名も世を忍ぶ仮名かも知れない。唯、投稿ハガキの消印が横浜であることから、その周辺の路上生活者かと思われる。

ここに投稿歌の中から入選歌九首を紹介し、ホームレス公田耕一の新しい日常と、作歌の力量を顕彰してみたい。

(旧かな)

。哀しきは寿町と言ふ地名長者町
さへ隣りにはあり
。パンのみで生きるにあらず配給
のパンのみにて一日生きる
。一日を歩きて暮らすわが身には
雨はしたたか無援にも降る

。日産をリストラになり流れ来た
るブラジル人と隣りて眠る

。水葬に物語などあるならばわれ
の最期は水葬で良し

。鍵持たぬ生活に慣れ年を越す今

さら何を脱ぎ棄てたのか

。「柔らかい時計」を持ちて炊き
出しのカレーの列に二時間並ぶ

。百均の「赤いきつね」と迷ひつ
つ月曜だけ買ふ朝日新聞

。親不孝通りと言へど親もなく親
にもなれずただ立ち尽す

作品からもやはり作者は横浜寿町
のドヤや、その周辺の路上を住家と
していると推察される。

総合誌『短歌』の歌壇時評に、谷

岡亜紀がホームレス体験記を寄せて
いる。その一部を抜粋する。

私は二〇〇七年夏に十日ほど、同じ寿町のドヤに寝泊りした。一泊千五百から二千円、二畳半ほどのまことに「棺のような一室」である。もし私が仮に「公田耕一」だったらどうだろう。十日間に過ぎないが、私は

五百から二千円、二畳半ほどのまことに「棺のような一室」である。もし私が仮に「公田耕一」だったらどう

。公田耕一さん、あなたは誰なので
すか。謎は深まるばかりだが、今

私は「謎のホームレス歌人」のまま
でいて欲しいとも思っている。

◆ ふれあいの祭典兵庫短歌祭

ジユニア部門で宍粟市立千種中学校の山尾紋未さんが兵庫県知事賞を受賞されました。

。宍粟市議会議長賞

。「もう少し器量よければ売れたのに」残りし芋を兄は置きゆく

。宍粟市議会議長賞
。宍粟市長賞
。土石流に根こそぎ流れし友の庭山
茶花一樹突き抜けて咲く

森本千代子

。引き出しの奥で見つかるキーホルダー渡せなかつた君への土産

地勘もあると記している。

ドヤ街には、過去と決別して素姓を隠す人も多いと聞く。ひょっとして「公田耕一」もホームレスの隠れ蓑をつけた一流の歌人かも知れない。

然し謎のホームレス歌人は、二〇〇九年、ぴったりと沈黙してしまうと言ふ。それから一年余の月日が流れ、ホームレス歌人の歌も、公田耕一の名も私から遠ざかっていた。

この度、この稿を書こうと思いつく。一連の作品をしみじみ味わうと作者は、短歌を通して奢り多き社会へ、そして若者へ大きな問題を提起しているのではないだろうか。

。兵庫県議会議長賞

。稲作をたのしみとせし半世紀よろめく足にあぜみち歩む

石原 幸夫

。兵庫県議会議長賞
。稲作をたのしみとせし半世紀よろめく足にあぜみち歩む

藤原みよし

◆ 第六回宍粟市市民短歌祭
(九月十二日・宍粟防災センター)

。六栗市教育委員会教育長賞

青草の風の匂へる日だまりを歩幅

小さき父と歩めり

田中 典子

。文化協会長賞

「頑張ろか」声を掛けつつ九十五の母の髪切る水無月の午後

渡辺 澄子

。宍粟市歌人連盟賞

病み牛の埋葬用の穴を掘る男咽びて重機操る

衣川有賀子

新茶揉み香にくつろぎて嫁を待つ

嶋田 操

今宵は短歌を少し思ひぬ

安東 恒雄

小商ひ売上げ良ければすべてよし

岡本 健三

一度だけリセットボタン叶うなら

門積 健三

いつに戻るうわれの若き日

紅葉マークはトラクターにも貼ら

れるて後期高齢者農を支ぶる

岡本 光代

今日も又ああ旨かったと食べくれる人と生き来て八十路の近き

植木 操

。流れ星叶うようにと願い事考える間に消えた夏の夜

きのふより迷ひしがふと決まる雨戸をあけし朝のひかりに

。かなしみを詰めて捨てしかダンボール一つ転がる畠の草生に

山村フサ子

◇一葉会十一月詠草（新かな）

略字多き漢字のなかに画多き鬱が略字にならざる不思議

安政 嘉子

。冬苺つらなる赤実ひかりおり時雨ふたたび這うように来て

植木 洋子

。いつも通る道のかたえの彼岸花終りて夕づく道の遠しも

釜村 靖子

。小林ハママ子空を仰げど星も見えざり

小川千代香

。亡き夫はいずこの星になりしやと空を仰げど星も見えざり

瑞木 瑞木

。滄つぼに病ら葉落ちて冬の雨降り続いて季節は進む

岡本 光代

。金色のひかり放ちて咲き満つる被災地の田を埋むひまほり

谷林 立身

。洋々とゆくチャオプラヤ川に影う

森下 達子

。遅れし今年の秋もたけなわ

栗山 文子

。つす王宮寺院は茜に輝く

森下 達子

。杜の樹は暗ぐらと立ち葉叢よりざざめくよう見ゆる青空

。学生の部（特選三首 歌のみ）

栗山 文子

。幼日の孫の作りし粘土雛飾りて受

森元ゆきこ

。色褪せて死にゆくメダカ寂しけれ

山口 ひさ

。掌もて揃うに軽き命よ

千本 安子

。色褪せて死にゆくメダカ寂しけれ

山崎高校 志水 俊樹

。興味に瞳輝く学童と老人ら勇みて

山崎 智絵

。校舎に遊び

。佳作

。流れ星叶うようにと願い事考え

。瀬戸内のいすこに在りし海苔網か買いきて今日は猪垣となせり横野 光子

◇水薺グループ（新かな）

。赤紙で兵士買いそな今の母国燃える紅葉に暗い影見る

。純白の花嫁衣裳が枯れた野に恥じらい舞う様に山茶花の初花

。瀬戸内のいすこに在りし海苔網か

俳

句

青嶺句会の吟行

青嶺句会 茂田 茂太

・ゆつたりと寝釈迦の山も冬に入る

良子

青嶺句会の吟行でたつの東山公

園を訪ねるのはもう十回を越えてい

る。

春の山桜も美しいが、秋の紅葉は

私達俳句を作る者にとって一段と趣

が深い。巻頭句の寝釈迦山を眼前に

晩秋の公園に分け入る。

・止めどなく紅葉且つ散る女坂

光子

・友四人傘寿の笑顔菊日和

とみ代

・秋草は皆憐くて風の道

駆雲

・小春日や弥生の史跡眠る郷

チエノ

・逆光に透けて紅葉の美しき

美保子

・まれといふ小春日和のひと日旅

緑山

・冬日向人のぬくもり探しをり

明美

・つづれ折る山路転びつ舞ふ紅葉

ゆき

「今日は句会を休もうと思っていたけど、来て良かった」

・冬吟行左右に寝釈迦と磨崖仏

延子

・黄砂とび色づく山はセピア色

幸子

・冬至から明るき未来始まれり

茂太

さすがに当会の俳人はレベルが高い。素晴らしい句が次々に披講される。

昼食の料理の美味しさもさることな

がら、八人の美女と二人の男の力関係も面白い。日本の文学界は女性で

成り立っているのが実感できる。

美女と言うなら吟行欠席の四人を忘れてはなるまい。



青嶺句会詠草

棟梁の声こぼれ来る焚火跡

秋久光子

・小春日の温みとり入れ夜具たたむ

君子

・散りしくは山茶花の紅古刹道

駆雲

・まれといふ小春日和のひと日旅

緑山

・冬日向人のぬくもり探しをり

明美

・つづれ折る山路転びつ舞ふ紅葉

ゆき

「今日は句会を休もうと思っていたけど、来て良かった」

涙が出るほど嬉しい言葉であった。いつまでも仲良くやって行きましょうと、心中で念じた。

古里は茶の花日和ほっこりと

薄き陽を集め茶の花ふくよかに

杉山美保子

田中良子

延子

・涙が出るほど嬉しい言葉であった。

いつまでも仲良くやって行きま

しょうと、心中で念じた。

咲きついで庭の茶の花雨に散る

鳥羽チエノ

木のはせて会話途切れる焚火の輪

原田駆雲

茶の花の盛りと云ふも慎ましく

永井とみ代

車椅子押す手やさしきお茶の花

三浦ゆき

山峠の茶の花白く昏れ残り

山口榮子

お茶の花丸くはじけて床の間に

若松幸子

目に滲る焚火の匂いなつかしく

渡辺明美

私達の青嶺句会ほど、笑いに始ま

り笑いに終る会もあるまい。先日も

延子さんが帰りぎわに一言呴いた。

「今日は句会を休もうと思っていた

けど、来て良かった」

山脈句会詠草

露座仏の豊頬灼けてなほやさし

秋久光子

・耐え難き暑さに耐えて八十路生ぐ

浅田蕪耕

タづつに柚子の金色暮れ残り

稲田富子

醉ひ深め芙蓉は玉を結びたる

宇野幸子

炎天や大地うるほす雨が欲し

栗山きよみ

短日や急ぎ調ふ祝儀物

田中美恵子

初燕同窓会へ発つ朝に

西田 宣子

今年酒白寿の顔のうまか皺

福田 祥栄

露草としたしくなりぬ車椅子

薄木満寿恵

白牡丹句会詠草

アイスクリン舐めつつ丸い桂浜

井口 洋子

凛として菊人形の舞い姿

田中 慶英

山の音木の音残し山眠る

千種 洋子

犬ふぐり町屋の角の小百姓

鳥羽 千恵

赤とんぼ優しい指を探しあおり

福井 清翠

落柿舎の門先広し芋の秋

松本 壽子

寒月や一日遊びし子の寝顔

三浦 ゆき

建前のクレーン伸びきる小春空

宗平 圭司

さわらび句会詠草

おそろひの帽子の児たち園小春

庄 昌子

亡き夫に遇える氣のする花野かな

川崎 栄子

夕顔の渦解く早さ闇にあり

山岸その子

米櫃の満杯となる秋じまひ

矢野登次郎

児の残す小さき狼藉秋の庭

本條 淑子

酒蔵の湯煙まぎれ朝の霧

壺阪加代子

今生のくれなる尽し冬紅葉

藤井 七代

キャンプ場瀬音ばかりに紅葉濃し

小林 紫生

吊橋をわたれば山路木の実降る

山中 正子

しそう笛ゆり句会詠草

内股の孫まばゆくて七五三

小田 朝子

首ながくして子らを待つ年の暮

垣内 安代

星冴ゆるつたい歩きの夫とおり

坂井 弘昌

アスファルト道路を小鹿疾走す

竹野 優子

極月の賑わい遠く老いの家

土井 洋美

夕映えの山の紅葉に足とどむ

谷口 昭子

野ぶどうのサファイア色を果実酒

に 内藤 裕子

駆け抜けるバイクに纏ふ落葉かな

天涯へ届け祝賀のほととぎす

福元 敦子

緑陰にフルート響く句碑の丘

秋久 光子

老鶯も興を添えたる除幕式

井口 泰子

一人ひとりの顔浮かべ賀状書く

東 田鶴子

畠での往生が夢障子貼る

是兼 妙子

あちこちに飛行雲浮く開戦日

坂井 恵子

ふわふわと天から舞ひし雪婆

坂井 小百合

人恋し涉つてみたし虹の橋

坂井 久栄

星冴ゆるつたい歩きの夫とおり

竹野 優子

薰風の真っ只中の除幕式

角野 桂治郎

五色しそう句会詠草

☆新馬立風句碑除幕

薰風や世紀駆けぬく句碑の建つ

に 内藤 裕子

天涯へ届け祝賀のほととぎす

福元 敦子

緑陰にフルート響く句碑の丘

秋久 光子

老鶯も興を添えたる除幕式

井口 泰子

万緑や師の句碑よりの声を聴く

大西 敦子

天涯をめぐりて句碑の青葉風

西川 照義

師の教え光の俳句青葉風

富井 幸子

薰風の真っ只中の除幕式

角野 桂治郎



平成二十二年度

山崎郷土研究会 研修旅行に参加して

山崎郷土研究会

宗 平 圭 司

残暑ことのほかきびしかった昨年の九月一日、今年度研修旅行は二十名が参加して次の四か所をめぐつた。

◇平城遷都一二〇〇年祭会場

(一) 平城京歴史館

「遣唐使が結んだアジア交流の歴史」と題して、平城京のくらしと文化・遣唐使シアター・平城京VRシアター等を見学した。

中でもVRシアターでは、五面マルチスクリーンで朱雀門から大極殿を立体画像で案内されたのは圧巻であった。

(二) 平城京跡資料館

平城京遷都から長岡京への遷都まで、貴重な資料が数多く展示されていることに驚いた。五十代桓武天皇の功績も改めて学んだ。

(三) 大極殿

あまりにも大きな建造物に圧倒さ

れた。建築工事費百八十億円 長期間を要して再現された平城建築は、豪華絢爛かつ優雅で、高御座も十分

間を要して再現された平城建築は、豪華絢爛かつ優雅で、高御座も十分鑑賞することが出来た。

◇柳生の里・家老屋敷
「柳生新陰流」で知られる剣豪柳

生の里の家老屋敷を見学した。豪華な大邸宅に柳生一族や、宮本武蔵の資料まで展示されており広大な庭園と共に往時を追憶した。

◇芳徳寺

柳生家の菩提寺で臨済宗。本尊は釈迦如来。柳生但馬守宗矩が亡父石舟斎宗嚴の供養のため創建した寺院で、開山は沢庵和尚。

本尊の両脇に柳生宗矩座像、沢庵和尚座像、烈堂和尚義仙像（宗矩の四男）が安置されており、寺の北側には、柳生家歴代の墓所があり、まさに柳生一族の名刹であった。

◇岩船寺

今年の研修旅行は、平城遷都一二〇〇年のイベント会場では、平城遷都イベント会場では、平城歴史館他どの会場にも多くのボランティアによる説明を頂き、さらに、岩船寺では住職の解説を頂いた。終日猛暑の中ではあったが、有意義な研修を終えることが出来た。

に鑑賞することができた。

○国宝クラスの仏像等はつぎのとおり

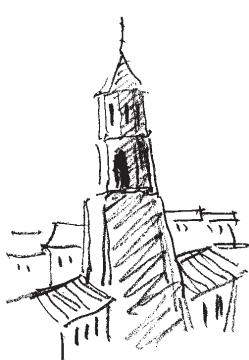
・三重の塔（鎌倉・室町時代）

・本尊阿弥陀如来座像（平安時代行基作）

・普賢菩薩騎象像（平安時代 大徳作）

・石室不動明王立像（鎌倉時代）

・他に仏像六体・壁画多数



遣唐使船



大極殿

九州縦断記

山崎植物同好会志水出西

ゴールデンエイジ

深川剛佑

新潮会

といつています。

また、一般的に心と体とは相互に関係あって働いているといわれていますが、年齢が進むにつれて当然、老化現象が起ころうとしているのです。

「老化現象」というのは、身体の細胞数が減って来るために、身長がちぢんだり、臓器に萎縮が起こり、か

らだ全体の活動もゆるやかになったり、環境への適応力も低下する状態をいうのだそうです。そしてこれら

の現象は決して病的現象ではなく、あくまでも「生理的現象」であると

いうことを間違えてはなりません。

私も体の老いは素直に受け入れ、「老化現象をダメになつたと悲觀せず生理的現象である」と樂観的に受け入れ「いつまでも明るく元気に」と常に心に描き精神活動を上昇させる生活を心がけ、ゴールデンエイジを目指したいと思います。

最終日、八幡社の總本宮「宇佐神宮」へ参拝、役員さんが多數居られる、新嘗祭と書かれている。あと思つづけその後もかなり高い水準を保つていてことをグラフで表し、人は長年の人生経験によって、想像力、連想力、洞察力といった高度の精神作用は深まっていき、適切な生活環境と、何かに打ち込むものを持っていいる老人は、益々精神の輝きを増し、

身体の健康も保持できることになる

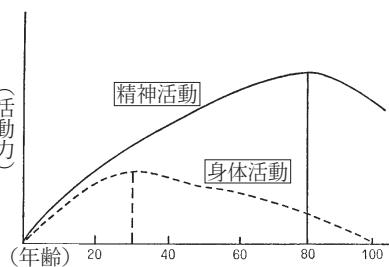
ここから石油備蓄基地遠望。知覧特攻基地に行き、友人の兄で十八才で逝った方に冥福を祈りました。
鹿児島神宮（大隈国一宮）参拝、ここにも鹿児島県木のクスノキの大木がありますが、カイコウズ（ディゴリマメ科）は一向に見かけない、近くにある隼人塚見物。

翌日、青島海岸で軽石を拾う、この辺りの火山噴出物だろうか。絶滅が心配されているホシタカラガイが売られています。

宮崎県木はフェニックス、至る所に林立しています。都農町辺は口蹄疫最大の被害地、犠牲になつた牛たちにお詫びを言いました。それから、雨の中、高千穂峠を散策しました。

最終日、八幡社の總本宮「宇佐神宮」へ参拝、役員さんが多數居られる、新嘗祭と書かれている。あと思つづけその後もかなり高い水準を保つていてことをグラフで表し、人は長年の人生経験によって、想像力、連想力、洞察力といった高度の精神作用は深まっていき、適切な生活環境と、何かに打ち込むものを持っていいる老人は、益々精神の輝きを増し、身体の健康も保持できることになる

翌日、指宿スカイラインを通過、



私の碁の師匠

山崎囲碁同好会

三宅 哲朗

私が碁を始めてもう五十余年になります。最初は大学にはいってからほんの初步をやった程度でした。本格的にやりだしたのは会社へ入ってからでしたが、それもいわゆる昼休み碁が多くてバタバタと忙しい碁でした。徐々に力がついてきたのは休みの日に碁会所通いをするようになってからだと思います。

その碁会所の席主は、頭のハゲあがつた年配のおじいさんでしたが、若いときの院生あがりとかでかなり強い人でした。六、七目置いてもボロボロと簡単に負けていたことを思いました。その碁会所で知り合ったのがKさんでした。アマチュア五段位の実力者でしたが、いつも柔らかな笑みを浮かべたもの静かな人でした。低段者の私などでも気さくに相手をしてくれました。石を打ち終てその碁を振り返り「あなたにこう打たれていたら私の負けでした」と

常に敗者をいたわる優しい心遣いの人でした。もう、その人に打ってもらいうのが楽しくて、手の空ぐのを待つて対局してもらつたものです。

だんだん親しくなつてKさんのお家まで遊びに行って打ってもらつたこともありました。夏の暑い日に、

自宅の菜園でとれたてのおいしいトマトをどっさり頂きながら、汗をかきかき打つたのも懐かしい思い出です。そうこうしながらKさんはわたしにとってまたとない得難い碁の師匠になりました。

しかしこの世は無情です。Kさんが突然悪性の癌に倒れたのです。私がお見舞いに病院へ行ったら彼はニコニコと嬉しそうに「退院したらまた打てるのが楽しみだね」と言つてくれたのに、日を置かずして卒然とあの世に行つてしまつたのです。

あれからもう数十年が経ちました。自分はもう老境に至りながら、いつまでたつてもうわづいた碁を打つばかりです。あの師匠が生きていたらどう言われるだろうかと思うとおはづかしい次第です。

私の「景色」

山崎茶華道連盟

下村 久仁甫

季節ごとに、私たちのふるさとは美しい景色をみせて、心を楽しませてくれます。そんな景色にふれるとき、「この国に生まれてしあわせだなあ」と胸がいっぱいになります。景色を身近に味わえる素晴らしい伝統に、私は幼い日に出会いました。母がやさしく手を取つて教えてくれたお花とお茶です。摘んできた野の花を器に生けると、ふんわりと景色がひろがり、お菓子が目あてのお茶も季節によつてしつらいを変え、けしきを変える事でおもてなしの心を表す事を知り、いつの間にか、無上の楽しみとなりました。

今では、指導する立場になりましたが、幼いころ、「まあ、上手にでたが、幼いころ、「まあ、上手にできたわね！」と笑顔で褒めてくれた母の言葉を、ふと思ひ出し、思わず私も笑顔になってしまいます。：あのときの母と私も、春の日の景色にとけこんでいたのでしよう、きっと。

そんな楽しい記憶に同調するかのように、今、私達のいけばな嵯峨御

流が推進している「景色いけプロジェクト」に参加しています。

嵯峨御流の名をご存じない方も、春の桜、秋の紅葉の美を求め、いまや世界中から人々の訪れる、嵯峨野の名はご存じでしょう。今年の大河ドラマになつた“江”的娘、東福門和子が暮らした御殿が伝わる旧嵯

峨御所大本山大覺寺も。

その嵯峨野・大覺寺に毎月何度か足を運んで、華道家としての仕事をしています。嵯峨御流の源は大覺寺の四季の景色を映し出す大沢の池に始まり、その源である池の、かつての美しい景観を取り戻し、大切にすることでの私たちの身近な景色、たとえば、揖保川の美しい水の流れ、上流の深い渓谷など大自然へのいとおしさを思う心を育て、未来へ伝えを行こうとしています。

昨夏には一般の方や若い人にも自然の大切さ、花の一輪の美しさ、もちろん、楽しさを知つていただこうと、社中展『暮らしの中の楽しい生け花展』花・華・はな』を文化会館ミニギャラリーで催しました。思がけず大勢の方のご来場頂きとてもうれしく、又感激しました。今年も私は新しい仕事と出会いが待っています。

いけ花という伝統文化を守り、奥深さと楽しさを多くの人に、未来の人々に伝えるために！

謡曲同好会発足 を振りかえつて

山崎謡曲同好会

上田 隆雄

昭和五十一年から山崎石男先生に

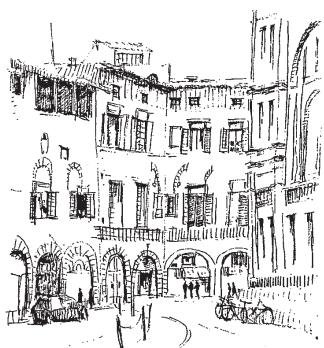
謡曲を教えて頂いておりましたが、私は元来怠け者として稽古に行く度に「よく本を読んで来なさい。」と言われまして、よく覚えないまま現在に到っております。

三月十四日に防災センター三階和室で第三十回宍粟謡曲同好会大会を終えたのを機に最初から振り返って見ました。第一回宍粟謡曲親善友好大会をセンターワークのみで開催され「秋田泉謡会・内山北露会・鶴崎観和会・波賀福主会（現在の翠謡会）・山崎篠謡会、第二回・三回は山崎農協会館三階大ホール、第四回はセンターワークのみや、第六回西兵庫信用金庫六階ホール、第八回・九回・十二回は山崎文化会館、第十三回波賀町町民センター、第十四回山崎文化会館、第十五回城下ふれあいセンター、第十六回センターワークのみや、第十七回・十八回・二十回城

下ふれあいセンター、第二十二回波賀町民センター、第二十四回・二十九回・二十六回（市になって一回）・二十八回（三回）三十回（五回）謡曲同好会会員名簿を見ると昭和五十五年十一月現在八会（社中）一六一名であったのが平成七年一月現在九会一二二名に減少している。二十二年の現在は何名だろうか？

高齢化がすすむなかではあるが、

昨年から江崎金治郎先生の企画によって山崎小学校下級生に能楽教室をして下さるよう聞いたのでたのしみにしています。昨年九月五日第十六回山崎薪能第一部で素人われらの前座で演じてくれたのを見聞きしてほんとうにたのもしく思つた次第です。



時代の流れ

山崎邦楽の会

石野和雄

私達の今までの会名は「山崎邦楽邦舞研究会」でした。邦楽と邦舞は

本来密接な関係なのですがこの度邦樂と邦舞を単独の会として独立し、より活動し易い形に組織替えをして、新しく出発しました。先人達の足跡を受け継いで今日まで続けてきましたが、その間数々の楽しいこと、むずかしいこと、又ハピニング有り、何もかもが懐かしく思ひ出されます。

邦樂器なるものは大体天然の材料で出来ているもので、温か味のある音だと思います。和樂器と謂われるものは、本来その素材のもつている音を出してくれます。たとえば尺八

にしても、天然の竹そのままで作られています。その音は竹のもつてゐる独特の「音色」があります。音楽として楽しめるのも、唯音の高さの変化だけで無く、終極は音色だと思います。同じ高さの音なのに、奏者によつて、その人の音色が出るもの

だと、今になつて解るようになります。竹の響きに魅せられて、その竹のもつ精一杯の音を出せた時に、喜びを感じます。又趣味を通じて、多くの人達との出会いがあり、交流があり、そのことが人の一生を、より幸せにしてくれます。趣味をもつてゐることが、晩年になつてどれだけありがたいことか、つくづく思われます。一人でも多くの人が邦樂に親しんで頂けたらよいのにと念願していますが、仲々取り付き難く、長い修業に耐えられないのか、後継者が育たないのが現状です。

邦楽などは若い人には向かないのか、現代社会には受け入れられ難いのか、惜しい事だと思いますが、我々の努力が足りなかつたのかも知れません。日本古来の良き伝統が、いつまでもこの山崎の地に続くこと願う

次第です。

地球の回転は一秒たりとも止りません。時間は少しの休みも無く過ぎてゆきます。光陰矢の如し、と謂われるよう待つてはくれません。時間の大切さを思い、授かった命を精一杯生きて、悔いの無い生涯を送りたいのです。

踊りとの出会い

さつき民踊グループ

福原光子

山崎へ嫁いで四十数年。

子育ても終り、仕事も退職し、フツ

！と我に帰れば仕事と子育てに無我夢中だった自分が、無趣味で、無器用、友達も無くこのままではボケてしまうのでは、と不安でした。

そんな折、義姉さんから「さつき民踊グループ」に入会した事を聞き、その時は盆踊りもした事のない私は到底無理だろうと諦めていたのですが、主人に相談、背中を押され意を決して入会しました。

身体は固いし、覚えは悪いし皆様の足を引っ張るのではと不安でしたが、いざ入会してみたら明るい方ばかりリーダーの西川を中心には家庭的な素晴らしいグループでした。

又坂東流名取りの坂東寿賀幸先生の御指導が受けられるなんてびっくりでした。分かるまで丁寧に教えて頂き、少しずつではありましたがあととか皆さんに付いて行ける様になり、一年後

位には初舞台。

人様の前に立つ機会もなく、時々芸能祭や秋のふれあい祭りを観に行っていたのですが、ご年配の方が唄や踊りに堂々と立派に演じられているのを観て感心し尊敬しておりました。

いざ自分が舞台に立ってみると頭は真っ白、足はガクガクものすごく緊張しました。

それから毎年文化会館で二回、数回のボランティアに出させてもらい、何とか楽しく踊れる様になり、逢う人に「良かったよ」と言つてもらつた時のうれしい事、思い切って踊りをして良かつたと思いました。

四年目を向かえて踊りの楽しが少し分かって来た様な気がします。

痛い足を引きずりながらですが、沢山のボランティアに参加させてもらう事で、多くの人達に喜んでもらい私の生きがいにして行こうと思ひます。

でも、色々と工夫したり、考えたりすることはできます。

机に瓶やグラスを並べても、上から見たり、斜めから見たり、横から見たり、もっと低い位置から見たりすることでおどろきます。そうすることでおどろきます。そうすることでおどろきます。街を見るのも、街角から見ると

絵を楽しむ

山崎美術協会

福岡久藏

正面から見るとでは街の雰囲気が変わつて見えます。

その他、樹木の数を減らしたり、建物の高さを高くしたり低くしたり、街灯を描きこんだり、トンネルがあるのに消したりもします。

秋の季節感をだすために、赤やオレンジの暖色でまとめてみようか、いや少しだけ反対色の緑か青をアクセントに入れてみようか、どうしようかと、色々と迷います。色のこと

は本当に難しいです。行き詰まつたら、白や灰色や黒などの無彩色だけで着色してみようか、いやいや、とりあえず自然の色を着けて考えることにしよう。ところが、いつたん色を着けてしまうと、なかなか変えることが難しくなり困ります。

描いても描いてもうまくいかないのですが、それだけにうまくいった時など、わくわくするほど嬉しくなります。

本当に長い間、飽きもせぬ絵を描いてきたものと思ひます。今では、それが私の生活の一部分となつているといえるでしょう。そして出来上がった絵を部屋に掛けて眺めるのも楽しみの一つです。

芸能祭で想つたこと

山崎詩舞道連盟

北辰吟詠会 進 藤 賀翔勝

山崎町民合唱のおもしり

山崎町合唱連盟

木下豊子

な所に出かけて行つて、癒しの歌を
歌いたいと思っています。
人数が少なくても出来るコーラス。
美しいハーモニーをめざして！

平成二十一年七月、私達の恩師であり最上吟詠会の創設者である森下賀励樹先生が突然他界され大きな穴が「ぱっかり」あきましたが、会員が、一丸となり先生の遺志を引き継ぎ、少人数ではありますが吟の向上をはかりながら稽古に頑張っています。

私が吟の道に入門した頃は各自治会には流派は違うが必ず教室があったように思います。それが今では高齢化が進み一人かけ二人かけ又カラオケ、民謡ブームに押されいつしか詩吟も衰退して行つたように思います。そこで賀堂流では数年前より「一人一声運動」を行つていますが会員の増加には結びつかないのが現状です。この度原稿の依頼を受けふつと思つたのが十数年前になりますが、文化会館で行つた「最上山の鐘」の構成吟でした。実際に最上山の鐘の音をテープに録音したり、小道具すべて手作りで練習を重ね約六十分余

りの構成吟を成功させた達成感は、今でも忘れる事は出来ません。

会員が一つになり、チームワークのすばらしさだったと思います。

「秋のふれあい芸能祭」では八分の持ち時間でしたので今回は構成吟

「日本の祝い唄」を七名で吟じました。又いつの日か流派を問わず、詩

舞道連の会員で構成吟を発表する日が訪れたらしいのになあと思います。

近年私たち町民合唱団は、「人数が少なくなったね。」と言われるようになりましたが、何十年も続いてきた歴史ある合唱団です。

初めは女性ばかりでしたが、近年は発表会に出る時は、混声として男性の方に加わって頂いています。ところが、最近、私たち合唱団の平均年齢をグーっと下げてくださる若い方が入団して下さいました。

これを機に、若い方がたくさん入つて下さることを願つています。

練習は、毎月第二・第四水曜日の七時半から聖旨保育園でしています。先日、写真にもありますように、グループホームやまなかに、慰問させて頂きました。普段あまり笑顔を見せないと言われる方でも、私たちと一緒に童話や昔懐かしい歌を口ずさんで、笑つてくださいました。

これからも、機会があればいろん



山崎さつき祭り

を顧みて

播磨さつき会

田 口 實

先人諸兄のご努力の積み重ねが、今年で第五十二回目の山崎さつき祭りを、去る五月二十九日～三十日に開催いたしました。

昨年はインフルエンザの大流行もあって中止しての今回、心配をしておりましたお客様の出足についても、県下各地よりのお馴染みさん、近隣府県からもこれまた懇々たる指導コーナーまでお越し下さる方々も多数あって大変嬉しい思い、つい「また来年も来て下さいよ。」と口走る始末。これも偏に、好天にも恵まれ、関係各位をはじめ参加下さった団体、個人の出店など併せて三十にも及んだ大勢のみな様方のご協力のお陰で、平年の八割程度の人気でありましたこと、来年に向けて広く声を高々にピールすべく自信を得たところであります。

毎回、実行に当たり改革、見直しを計りながら、より多くの方々の参加



を乞うため範囲を広めることに努めておりますが、市政発足六年目を迎える第五十三回には市木の「ブナ」や市花「ササユリ」の展示作品もお目見えする時期ではと、期待もいた

しているところであります。

そして市内各地域の村おこしや特

產品づくり活動を結集して各地区毎のイベント元より多くの団体が挙つて参加できるような時期と参加の範囲、展示品、即売、ステージイベン

トなど総合的に検討する実行委員、プランナーを編成し市民上げて、永続性のあるものに成長させていきたいものです。

最後、諸事万端ご指導ご協力を賜りました宍粟警察署のみなさま、市役所のみなさま、そして北斗警備のみなさま方に、衷心感謝申し上げ、來るべき美しい年を夢みつつ失礼いたします。

大変嬉しい思い、つい「また来年も来て下さいよ。」と口走る始末。これも偏に、好天にも恵まれ、関係各位をはじめ参加下さった団体、個人の出店など併せて三十にも及んだ大勢のみな様方のご協力のお陰で、平年の八割程度の人気でありましたこと、来年に向けて広く声を高々にピールすべく自信を得たところであります。

毎回、実行に当たり改革、見直しを計りながら、より多くの方々の参加

先達とともに

平 成 会

阪 口 隆 裕

私達、平成会が親世代の新潮会の志を引き継ぐ会として平成元年に発足して、早くも二十年を越えることとなりました。

その間、地域文化・福祉等に何かしらと関わり貢献することが出来ないかと、手さぐりながら地道な活動を続けて参りました。

初めは何をすべきか、何処に向かえばよいのか正直不安であったと記憶しております。

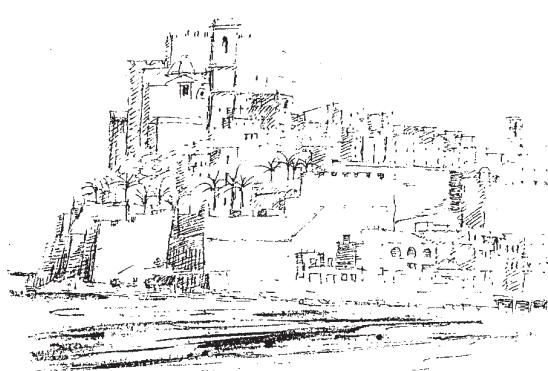
しかしながら新潮会を始め諸先輩方々の過去に成されてきた多くの活動事業等を参考に、しだいに独自の事業を少しづつ作り続けて来れたのではと自負しております。

思いますと、文化とは過去の良き物を受け継ぎ、守りそして少しづつ加えていく事によって形が成されるものではないでしょうか。

特に、日本の文化は諸外国とは違

た世界に誇る独特のものです。大切に守りながら伝え、残していきたいものです。しかし、時代が変化しがローバル化が進むにつれて、伝統的な古い物を忘れがちになりつつあります。

その様な中で、私達の世代として、この宍粟文化を伝えていく役割の一端でも担っていかればと、そういう使命感を胸に日々研鑽を積んでいきたいと思っております。今後とも地域の皆様と共に歩んでゆく平成会として、どうぞ宜しくお願ひいたします。



何か一つ趣味持つて

長生きしなはれ

山崎民謡連合会

小野晋

既に言われている通り、我国は急
テンポで高齢社会に推移している。

国際連合では、老年（六十五歳以上）

人口比率が七%に達した国を高齢化

人口国、十四%以上が高齢社会、二

十一%以上が超高齢社会と定義して

いる。それから考へると我国は、昭

和四十五年に七・一%に達し、七%

から十四%になるのに、要した期間

が欧米先進諸国では、四十五年から

百十五年かかったのに、日本では二

十四年で達している。これは世界で

も類を見ないスピードである。

日本は、平成六年に高齢社会とな

り平成二十二年には、超高齢社会と

なっています。西暦二〇五〇年には、

三十二%になると考へられています。こ

のような高齢化は、医学の発展や健

康の自己管理等によるのではないか

と考えられています。このままだと、

三人で一人の高齢者を養う「高負担

社会」となり年金、医療保険、介護などの支出が増大し社会保障制度が維持できなくなるのではないかと言われており、これは社会全体で考えなければなりません。

六十五歳を過ぎても、元気なお年

よりは働かれ、社会の生産性、経済性に貢献されています。ある程度の年齢まで働かれ社会に貢献された後、楽しい人生を送る事が大切ではないかと考えます。それには先ずボケ（認知症）ないよう。次の事を行えはボケ防止に役立つそうです。

一読 每日活字に目を通す。

十操 每日十分間体操をする。

百吸 每日百回深呼吸をする。

千字 每日何でもいいから千字書く。

万歩 每日一万歩を目標に歩く。

ボケない為に常に脳に適度な刺激

を与える、タバコはほどほどにして、

健康に留意し、元気老人として生涯

現役を目指して努めて行くことが大事です。人生の後半に幸せな生活を

送る事が出来たら、すばらしい人生

だつたと言えます。その為には人そ

れぞれに好みも違うのでその人にあつ

た何か一つ趣味、あるいは生きがい

になるものを持って元気でボケずに

せいぜい長生きしませんか。

川柳破丸会

清 水 省 三

民民と 蟬はよく鳴き 民も泣き
膝枕 昔の高さ 今どこに
谷口 柳幸

着飾つて 写したけれど 歳相応
席譲られ うれし悲しい 六十歳

捨てる服 よくよく見ては又しま
す。御入会を歓迎します。

简单に 入れる学校 出る苦労
海水浴 サングラスの日ビキニ追い

肉食系 草食男子 餌食にし
宿泊し 三人三色の クシリ飲む

メモをして 置場忘れて ひと廻り
香山 釣遊

妻退職 家は片付く はずだった
歳とつて 感謝しつつも 文句言い

飛びついた 旨い話に 火傷して
朗報を 聞いて振舞う 旨い酒

千本 花夢
岸本 新風

是兼 芽吹
履歴書に 卒卒卒でも 職が無い

志水亀の子
声かけた 振り向いた顔 どこの誰

中津 水香
飛びついた 旨い話に 火傷して

私は 言い度くなるよな 落し物

坂東 笑雅
妻退職 家は片付く はずだった
歳とつて 感謝しつつも 文句言い

飛びついた 旨い話に 火傷して
朗報を 聞いて振舞う 旨い酒

千本 花夢
岸本 新風

是兼 芽吹
履歴書に 卒卒卒でも 職が無い

志水亀の子
声かけた 振り向いた顔 どこの誰

中津 水香
飛びついた 旨い話に 火傷して

私は 言い度くなるよな 落し物

坂東 笑雅
妻退職 家は片付く はずだった
歳とつて 感謝しつつも 文句言い

飛びついた 旨い話に 火傷して
朗報を 聞いて振舞う 旨い酒

千本 花夢
岸本 新風

是兼 芽吹
履歴書に 卒卒卒でも 職が無い



合唱団に入つて

山崎児童合唱団

高瀬みのり

合唱団に入ったきっかけは、歌が好きで合唱団の定期演奏会を見て、楽しそうだったし、私も上手に歌いたいと思ったからです。

ちがう学校の子と仲良くできるか心配だったけれど、歌っているうちに友達になる事が出来ました。皆と歌っていると、難しい曲も上手に歌うことができ、その時はすごくうれしかったです。

卒団証にあるように「これからも人々とのハーモニーを大切にして」がんばりたいと思います。

山崎児童合唱団

岡田明日香

ピター」を歌いました。今度は山崎町で合唱祭を開きます。地元山崎に、たくさんの歌声が響きわたることを楽しみにしています。

山崎児童合唱団

中村未央

一年の集大成を見せる定期演奏会。一番大変で夏の合宿から練習しているミュージカル。そのミュージカルを通じて私が分かったことは学校・学年が違っても協力すれば一つにれるということです。合唱団は歌の実技も大切ですが、みんなの心が一つになつていなければ、いいものはできません。改めてその大切さを知りました。

「ターンアート展」とは

ターンアートクラブ
事務局



五年前、山崎町出身の画家・故松井叔生氏の遺作展を山崎町で開催した事が契機になり、松井氏の同級生である画家・福岡久蔵氏を中心に、各地方で活躍している宍粟出身の美

術家が相集い、ここ宍粟に作品を持ち寄り展覧会を始めました。もう三回を迎えています。

この会は活動の中心を宍粟に置き、宍粟の芸術・文化の刷新を図り、特に若い人達（主として高校生）の芸術性や文化性の向上と、小学生や中学生の夢を育み、その実現を支援しようと考へています。

現在は宍粟市内在住者は十名、遠くは沖縄や青森など市外在住者は十二名が集まり、総勢二十二名で、相互の研鑽と親睦を図っています。

今年も多くのメンバーが各所属の美術団体（東京）に出展。小西光裕氏は東京銀座での個展。今回より入会の前野達郎氏（神奈川）の出展など、にぎやかに活躍の報が事務局に入っています。

児童絵画教室を開いたり、作品の批評会を公開するなど宍粟の芸術や文化意識の向上を図ろうと、今年も頑張っていきたいと思っています。

地元の皆さんに出来るだけ多く見ていただき、数多くのご意見をいただく事が私達にとって大きな力となります。

よろしくご支援のほどお願いします。

毎年夏に開かれる「兵庫児童合唱祭」は、年に一度兵庫県の児童合唱団が集まって、お互いの演奏を発表し、交流しあうイベントです。私は今年、「風のささやき」と「ジユ

ただ今日本舞踊に挑戦中です

山崎日本舞踊の会 勝木初子

さようなら お師匠さん

—坂東壽賀春師匠を偲んで—

春陽会 井口定子

縁あって、四年前に日本舞踊を始めました。先生は、藤間豊己千先生です。「あなたは、ようお稽古を休むから、来とう言うても正味半分程しか来とらへん。」と力強く言われています。本当に、仕事、私用でお休みすることが多く、郁踊会の皆様には、大変ご迷惑をおかけしていますが、何とか多目に見てもらつて続けさせて頂いています。

そんな私が、また縁あって、大阪の藤間豊弘師匠にお世話になることになりました。習い始めて暫くたつた頃、「勝木さんは、器用なんか? 不器用なんか? わからんなあ!」と言われました。首、手、足が思う様に動かず、同時に動かすとなると、まるでロボットの様で、自分でも苦笑するしかありません。

昨年、宝塚の舞踊会に行かせて頂きました。これも豊弘師匠が、宝塚歌劇の方を指導されているということで、拝見する機会があつたのですが、「本当にお見事、すばらしい。」



と感心しました。隣りの席の先輩に、「あの宝塚の方達と、何度言つてもできん私とでは、教えて頂く師匠が氣の毒やわ。」と言いましたと、「生徒もいろいろや!」と返事が返ってきました。「なるほど」と頷きながら、開いた口が暫く開いたままでした。

日本舞踊を通して、多くの方とお近づきになり、学び笑わせて頂いています。お稽古をすることで、出来なかつたことができる様になることは、仕事の上でも生活の中でも、やれば出来ると言う励みとなっていました。いつか豊弘師匠に、「器用に踊れる様になります。お稽古をすることを楽しみに、細く長くマイペースで精進できたらと思います。

「大阪の村上です。はるえ伯母が亡くなりました。」上ずった声に返事の言葉も出せませんでした。つい前に、仲間とおたずねした時、きちんとベッドの上に正座して、ニコニコと私たちを迎えて下さった師匠。「あんた、来年百歳になるんだっせ。」「わあーすごい。絶対百歳まで今のがんばって下さいよ。」「あんた百歳過ぎたらあかんのだっか。」「エーお師匠さん。」こんな元気なやり取りをした師匠。

本当に百歳で逝ってしまわれました。何か残念で、やりきれない気持ち。もっともっと、度々たずねてあげていたら…と。

芸の道に生きてこられた師匠が身につけられた立ち居振る舞いや、人となりには学ばねばならない事がたくさんありました。ゆったりとしたようで、芯の強い師匠。私もそのような女性であり老人でありたいと、飾られた遺影を前にして、強く思つたものでござります。

「お師匠さん、本当に長いあいだご苦労さまでした。ありがとうございました。」

長い間の勤めをやめてから一年半ばかり、毎日ボーとしていた私が師匠の下をたずねてから今の日まで、尊敬し、お慕いしてお稽古に通わせていただきました。「あんた、音楽

ちゃんと聞いたんか。」と一喝。聞いてるんやけど、手や足が、そして体がついていかんのです。「それそなに首をかしげると、小学生活のおゆうぎみたいになるんや。」「ほら、今度は手の指が開いてわらわらやで。」しまいには目からしづくがポローリポロリ。でも、稽古が終ると、ニコニコ顔で「おつかれさん」と熱いお茶を入れて下さる師匠でした。

「ほら、今度は手の指が開いてわらわらやで。」しまいには目からしづくがポローリポロリ。でも、稽古が終ると、ニコニコ顔で「おつかれさん」と熱いお茶を入れて下さる師匠でした。

宍粟市山崎文化協会

役員及び団体名

事務局長	監事	会長	副会長	理事	理事
大畠	前野	福岡	伊野	井口	井口
安井	小野	久藏	操治	浅田	浅田
田中	清水	省三	耕三	宗平	宗平
m東西三十七m)	片山	武一	耕三	井口	井口
横堀、堀切、土塁、城道など、近隣	藤永	和彦	和彦	浅田	清水
地域でも稀にみる大規模な山城跡で	西岡	幸正	幸正	町	町
続く多数の削平地や畝状堅堀、井戸、	中谷	久藏	久藏	栗山	栗山
前野	涼子	真澄	真澄	竹添	竹添
前野	省三	正勝	正勝	谷川	谷川
大畠	克典	和雄	和雄	尾鼻	尾鼻
安井	涼子	行男	行男	伊野	伊野
田中	川柳破丸会	多江	多江	耕三	耕三
田口	ターンアートクラブ	播磨さつき会	播磨さつき会	新潮会	新潮会
前野	平成会	山崎歌人協会	山崎歌人協会	山崎植物同好会	山崎植物同好会
前野	山崎民謡連合会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎茶華道協会	山崎茶華道協会
大畠	川柳破丸会	山崎詩舞踊の会	山崎詩舞踊の会	山崎児童合唱団	山崎児童合唱団
安井	ターンアートクラブ	バンブーファイブ	バンブーファイブ	山崎俳句協会	山崎俳句協会
田中		山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎美術協会	山崎美術協会
m東西三十七m)		山崎詩舞踊の会	山崎詩舞踊の会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会
横堀、堀切、土塁、城道など、近隣		山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会
地域でも稀にみる大規模な山城跡で		山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会	山崎邦楽の会

同次長 井口 武一
(敬称略・順不同)

「やまさき文化」編集委員

編集長	鎌田 裕明	荒木 俊介	前野 良造
委員	浅田 耕三	栗山 節子	秋久 泰子
町	北川 勝敏	西川 博敏	前野 良造
悦子	栗山 光子	西川 菊子	秋久 泰子

事務局だより

十二月初めの日曜日に「篠の丸城跡」(通称、一本松)に登りました。

標高三百二十四mの子どもの頃からよく親しんだ山、山崎でお育ちの方なら大抵何度も登られていることだと思います。わざわざ「篠の丸城跡」と書いたのは、今回は戦国期の城郭をよく研究されている方の案内で、史跡見学を目的とした散策でした。

「篠の丸城」については、秀吉によって長水城の宇野氏が滅ぼされたときに共に落城した、「長水の出城」程度の知識しかありません。ただ、子供の頃から一本松の頂上付近には何段にもなった平らな地や盛り土があることは無意識のうちに認識していました。

今回、案内者の説明でその一つが郭跡(くるわあと)や堀跡などであること、本郭の規模(南北五十m東西三十七m)や南・西・北側に続く多数の削平地や畝状堅堀、井戸、

あることを知りました。

それでもっと興味深かったのは、地形から見て篠の丸城の大手が現在の山崎八幡神社裏の山道だったので、との話。八幡神社が現在地に遷

は、との話。宮されたのが応仁元年(一四六七)と社記にあります。では神社が来る前には何があったのか?

また、現在の八幡神社の西の谷には「大王寺」という字名が残っています。実際に昔、大王寺という寺院があつたのか、あつたとすれば「門前」という地名にも納得がいく、神

社地の以前の姿、寺院と篠の丸城主の関係は?・?等々、歴史に疎い私でも地元の由来となると興味が尽きません。

資料も乏しく謎の多い戦国期以前の歴史ですが、身近に何気なく残るこれらの遺跡でも見る日を養えれば色々なことを伝えてくれるようです。

普段の生活では気づかないような地形や地名が貴重な遺跡だったり歴史的背景のある名前だつたり:。便利だから、楽だからと言つて安易な造成で破壊されてしまったり、由緒ある名前が消えてしまったりするこどもの無いよう祈りたいものです。

表紙写真は前田欣一さんの川戸の獅子舞。子どもの多様な表情が屹立する獅子といい構図、紅白の幕が祭りの雰囲気を演出しています。各文化団体からの活動報告や随想は、今日の山崎文化の多様な有り様を語っています。寄稿有り難うございました。

福岡久藏会長が巻頭言で強調された「つながりを大切に」して、小誌が一つの社会的力として地域社会共通の文化の形成に資することが出来ればと願います。

辺見じゅんが、折口信夫の「一番完全なただ一つの物言ひだけを知つた人だけが、ほんとうのことばを発

編集後記

事務局長 前野 良造

編集長 鎌田 裕明

いぎだに
生谷温泉

伊沢の里

○お祝いの会食 ○法要後の会食
その他各種宴会承ります

〒671-2517 宍粟市山崎町生谷214番地1 TEL0790 (63)1380



◆最新型カラー現像機導入◆

カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
アニアカメラ

宍粟市山崎町東鹿沢26-3 本店 TEL(0790)62-2089
咲ランド店 TEL(0790)63-0533

春 幸せへの旅立ちに——。

ふじむら貸衣裳

宍粟市山崎町山崎181 TEL(0790) 62-0052

デンソー指定サービスステーション
自動車電装品整備・携帯電話代理店

カメウチ電器株式会社

本社・工場 兵庫県宍粟市山崎町今宿 98-15

TEL (0790) 62-1607(代)

太子営業所・姫路営業所・神戸営業所・福崎店

宍粟市を舞台とした信頼と連携の「コミュニティ活動支援型地域SNS」サイト

「しそうの逸話」ムービーシアターコミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=96

「しそうの原風景 一枚の写真」コミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=99

「しそうの地名(由来)」コミュニティ http://shiso-sns.jp/community/?bbs_id=102

その他、宍粟地域の情報がいっぱいのコミュニティやブログなど



しそうSNS・

PoweredBy 宍粟市商工会 &しそう観光協会 <http://shiso-sns.jp>

用途に合わせて
にしん個人ローン
●住宅ローン ●フリーローン
●マイカーローン ●カードローン
●学資ローン

・豊かな老後生活のために
・資産の効率運用に
にしん個人年金保険
●定額年金保険
●変額年金保険



豊かな街づくりをお手伝いする

西兵庫信用金庫

<http://www.shinkin.co.jp/nisisin/>



一献献上 品質本位

まごころを伝えます。

T E L. 0790(62)1010
F A X. 0790(62)6218



確かな品質と味わい。



SANYOHA I
山陽盃酒造株式会社
兵庫県宍粟市山崎町山崎 28

環境と家計にやさしい給湯器!

CO₂
削減

光熱費
カット



省エネ大賞受賞・高効率ガス給湯器

ecoジョーズ

お車と住まいの快適、なんなりと

ホンジョウ

(株)本條商店・ホンジョウプロパン(株)
本社 宍粟市山崎町中井 96

●石油・タイヤ・自動車用品 ●ガス・水道・住設リフォーム
☎0790-62-4321 ☎0790-63-1234

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

本店：播州山崎町さつき通り（電）0790-62-0170

山田店：播州山崎町山田（電）0790-62-0160

福崎店：福崎町西田原 1177（電）0790-22-7555

パソコン・OA機器・事務用品・スチール家具
各種修理・学校設備品・理化学機器

イトーオフィスサービス 株式会社

山崎町中広瀬117-12 夢公園南隣 T E L (0790) 62-0126